DEATH AND LIFE
SOCIAL MEETING

第２回死生懇話会 会議録

日　時：２０２１年6月１９日（土）
　　１４時００分～１６時３０分
会　場：滋賀県庁 新館７階大会議室

滋賀県では、誰もが避けられない「死」について真正面から考えることで、限りある「生」をより一層充実させる施策につなげる契機とするために、様々なお立場やご専門の方からなる「死生懇話会」を 2020 年 12 月 2 日に設置しました。

この懇話会は、どう生きるのが良いかといった価値観を押し付けるものでは決してなく、「死」や「生」の捉え方等についての様々な考え方や取組の情報を発信していくことで、それに触れた方 それぞれのアンテナにひっかかる“何か”を見つけていただき、より豊かに生きることのヒントを見つけていただけるものにしたいという思いで開催するものです。

そして、今後、多死社会を迎える中で、行政の役割や行政へのニーズもこれまでとは違ってくるのではないかと考え、「死」を捉えた「生」のあり方について、皆さんと議論を深め、様々な視点からのご意見や情報をいただくことで、多死社会において行政ができること、人生 100 年時代に行政に求められることが何かを探っていきたいと考えています。

2021 年 3 月 6 日（土）の第 1 回に続き、6 月 19 日（土）に「第 2 回死生懇話会」を開催しました。この冊子はその「第 2 回死生懇話会」の内容を会議録としてまとめたものです。

Mother Lake
滋賀県

【第 2 回死生懇話会　出演者】

広井 良典さん（ゲストスピーカー）
　京都大学こころの未来研究センター 教授
打本 弘祐さん
　龍谷大学農学部 植物生命科学科 准教授
越智 眞一さん
　一般社団法人 滋賀県医師会 会長
楠神 渉さん
　滋賀県介護支援専門員連絡協議会 副会長
藤井 美和さん
　関西学院大学人間福祉学部人間科学科 教授 死生学研究者
ミウラ ユウさん
　NPO 法人好きと生きる 理事
　一般社団法人こどもエンターテインメント 代表理事
青柳 光哉さん
　滋賀県立大学人間看護学部 ３年
三日月 大造
　滋賀県知事
上田 洋平さん（ファシリテーター）
　滋賀県立大学地域共生センター講師

〇事務局（滋賀県企画調整課）

それでは、お時間になりましたので、第２回死生懇話会を始めさせていただきます。

私は、滋賀県企画調整課の森と申します。よろしくお願いいたします。

この死生懇話会は、誰もが避けらない「死」について行政としても真正面から考えることで限りある「生」をより一層充実させるヒントを得ようと、昨年 12 月２日に設置をいたしました。本日は、３月の第１回に続き、第２回の死生懇話会ということで開催をさせていただきます。

まずは委員の皆様をはじめ、本日の出演者を御紹介させていただきます。

初めに、委員の皆様を御紹介いたします。

滋賀県立大学人間看護学部４年生　青柳光哉（あおやぎ　みつや）さんです。

続きまして、龍谷大学農学部植物生命科学科 准教授　打本弘祐（うちもと　こうゆう）さんです。Zoom で御参加いただきます。

一般社団法人滋賀県医師会 会長 越智眞一（おち　しんいち）さんです。

滋賀県介護支援専門員連絡協議会 副会長　楠神 渉（くすかみ　わたる）さんです。

関西学院大学人間福祉学部人間科学科教授　藤井美和（ふじい　みわ）さんです。Zoom で御参加いただきます。

ＮＰＯ法人好きと生きる 理事、一般社団法人こどもエンターテインメント 代表理事　ミウラ ユウさんです。Zoom で御参加いただきます。

続きまして、本日のゲストスピーカー、京都大学こころの未来研究センター 教授広井良典（ひろい　よしのり）さんです。広井さんより懇話会の初めに御講演をいただきまして、その後、議論にも加わっていただきます。

そして、懇話会のファシリテーターを務めていただきます滋賀県立大学地域共生センター 講師　上田洋平（うえだ　ようへい）さんです。

最後に、滋賀県知事　三日月大造（みかづき　たいぞう）でございます。

それでは、開会に先立ちまして、滋賀県知事 三日月大造より、一言御挨拶と本懇話会にかける思いをお話しさせていただきます。

〇三日月 大造

皆さん、今日も御参加いただきまして、ありがとうございます。梅雨の長雨の土曜日ということで、それぞれに御都合のあるところ、御参加いただいたことに感謝申し上げたいと存じます。

また、ゲストスピーカーを今回お務めいただきます広井さん、どうもありがとうございます。

ウェブで御聴講いただいている皆様方もありがとうございます。今回は、少し配信環境を改善いたしまして、後ほど皆様方からも御意見をいただける取組をさせていただきますので、よろしく御参加のほどをお願いいたします。

まずコロナ対策で申し上げれば、昨日滋賀県の対策本部員会議を開催いたしまして、おかげさまで医療体制の非常事態は脱出することができたと。しかし、十分減らない、下がり切らない、また変異株の出現などもあるので引き続き緊張感を持って対応していこうと、こういうことを呼びかけているところでございます。ワクチン接種も進めながら、一人一人の命を守る、そして「さよならのない別れ」というものをしなくてもいいように、ぜひ皆さんと力を合わせて取り組んでいきたいと考えております。

この死生懇話会は、誰もが避けられない「死」に向き合いながら、限りある「今生きていること」、そして私たちが享受している「生」をどう捉えるのか、一緒に考える場をつくろうということで設置をさせていただきました。また、せっかくおかげさまでいただいて生きているわけですから、よりよく生きていくためにはどういうことを考え、どういう暮らし方をすればいいのか、支え

合いをつくればいいのかを考えていくきっかけとしてこの死生懇話会があればいいなということを考えているところでございます。「こうあるべき」とか「こうあらねばならない」ということよりも「どうあったらいいのか」ということを一緒に考えていく場。したがって、「答え」よりも「問い」というものを一緒に出し合っていく場になればいいなということを考えております。

昨年12月に設置いたしまして、3月に第1回を開催させていただいたんですが、実は、コロナ禍もありましたので「そんなことやっている場合か？」というお話ですとか、行政が、県がやるということについて賛否両論があったことは事実でございます。ただ一方で、こういう感染症下だからこそ命やつながりの大切さが分かったというお声ですとか、行政が開催する死生懇話会だからこそ気軽に参加し、いろんな考えを聞くことで自分自身の考えを広めることができるのではないかといったようなお声もたくさんいただいているところでございまして、そういう意味でも、3月以降、反響は多大でございました。多くもあったし、大きくもあり、また深くもあったということでございます。

今回、広井さんに来ていただいて、少し俯瞰した形で、また歴史もひもとく形で多くの方の死生観について御披瀝いただいているお考えなども御紹介いただきながら、少し広い意味でこの「死生」について考え、今後の懇話につなげていきたいなと考えているところでございますので、今日も活発な議論を展開していただきますようにお願いをいたします。

最後になりましたけれども、知事である私を含め、ゲストスピーカーの広井さんを含め、みんな「さん」づけで呼び合って肩書や立場に拘泥しない議論をしようということを第1回から呼びかけておりますので、この点も皆様方によろしく御案内申し上げて、私からの御挨拶とさせていただきます。

今日もよろしくお願いいたします。ありがとうございます。

○事務局（滋賀県企画調整課）

ありがとうございます。

本日は、この会場で、そしてオンラインでたくさんの方に御聴講いただいております。今ほどもお話があったんですが、せっかくですので、今日は御聴講の皆様より御意見や御質問、御感想などもいただければと思っております。

この後、広井さんより「死生観の再構築」をテーマに御講演いただきます。その中で現代は死生観の空洞化とも言える状況があるのではないかといったようなお話もしていただけるとお聞きしておりますので、例えば「死生観の空洞化」や「死生観の再構築」といったキーワードからそれぞれ皆様が日頃お感じになっていることがありましたら、コメントをいただければと思います。または、そういうこととは別に、この後の御講演の御感想や委員の皆様への御質問などをいただいても結構ですので、もし何かあればお出しいただければと思います。

コメントをいただく方法なのですが、オンラインで聴講いただいている皆様は画面下のチャット機能をお使いください。会場の皆様には、受付でお渡しした色紙とマジックを使ってできるだけ大きな文字でお書きいただければと思います。休憩時間に集めさせていただきますが、それまでに書けた方からお声がけいただきますと、スタッフが集めに参ります。

今日はこの会場の横のほうにホワイトボードを用意しているんですけれども、そちらに貼りつけて御紹介をさせていただきたいと思います。時間の都合上、議論の中で取り上げさせていただくのは一部になってしまうかなとは思うんですけれども、どういったお考えなりコメントをいただいているかということを御聴講の皆様に見ていただけるように貼りつけて、それを映していこうと思っております。できるだけ短めの文章で書いていただけますと文字が大きく見えるかなと思いますので、よろしくお願いいたします。

それでは、御講演に移らせていただきたいと思います。

「死生観の再構築」というテーマで約30分間ほどゲストスピーカーの広井さんより

お話をいただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

○広井 良典さん

皆様、こんにちは。御紹介いただきました広井です。まず、何よりこのような非常に貴重な機会に声をかけていただきまして、お話しさせていただけることを本当にうれしく思って、今日は楽しみにしてまいりました。

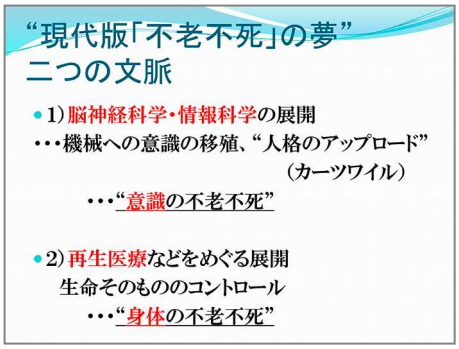
私自身は、もともと皆さんあんまり聞き慣れない「科学史・科学哲学」という文系と理系の中間の哲学系の専攻だったんですけども、その後は医療・福祉分野も含めて公共政策とか社会的なことをやってきた人間で、名前のとおりといいますか、広く浅くいろいろなことをやってきた人間なんですが、この「死生観」というテーマは私の中でも個人的にもコアにあるテーマで、それについて、拙い内容ですけど、30 分ばかり話題提供をさせていただければと思います。

この「死生観」というテーマは、ある意味で非常に普遍的なテーマであると同時に、極めて個人的といいますか、「生きて死ぬことの意味」ということですから、それぞれの皆様や私も含めて個人の人生の中で考えていくテーマであると思います。ですので、私自身のこの後の話もどうしてもそういう主観的な関心を踏まえたものになるかと思いますけれども、一つの話題提供ということで、「ああ、こういう視点もあるのか」ということで聞いていただければ幸いに思います。

タイトルを「死生観の再構築」としておりますが、これは、先ほどからもお話にありますように、何か一つの死生観、答えがあるということでは当然ありませんので、「死生観について、こういった形で考えていくこともできるのではないか」というような話題提供としてお聞きいただければと思います。

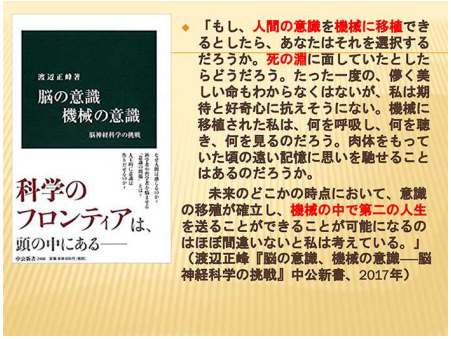
最初に、時代状況的なこと。それから、先ほどもちょっと出ました「死生観の空洞化と再構築」。それから、これは私自身が母親の介護とかをしている中で思った「生と死のグラデーション」。それから、最後はちょっと大きなテーマになりますけれども、そういった流れでお話をさせていただければと思います。

最初に「無と死を考える時代」ということで、なぜ今こういった「死生観」というテーマが人々の関心を集めるようになっているのかという、「今」という時代の背景みたいなことをちょっと考えてみたいと思います。



最初に、話題として「現代版『不老不死』の夢」ということを入れております。不老不死ということは古代からいろんな形で議論もされてきたわけですけれども、それが現代において、いわゆる科学技術とも結びつく形で、新しい形で浮かび上がってきていると思います。

それには大きく２つの流れがあると思うんですね。ちょっと分かりづらい話かもしれませんけど、一つは脳科学とか神経科学の展開で、これは要するに人間の意識あるいは脳の情報を機械に移植することができるんだと。それでずっと人間の意識は永遠に生き続けることができるんだというような議論ですね。



今、御覧いただいているのは、３、４年ぐらい前でしたか、ベストセラーになったような本です。これは東京大学の工学系の研究者の方が書かれた本なんですけども、そこに文章を引用していますように、人間の意識を機械に移植できるとしたらどうだろうかと。それが非常に魅力的なのではないかと。そして、下のほうですけれども、「未来のどこかの時点において、意識の移植が確立し、機械の中で第二の人生を送ることができることが可能になるのはほぼ間違いないと考えている。」と。もうこれになると、人生 100 年どころか、300 年、400 年。そういうことができるのは間違いないと考えていると。これはＳＦ的な議論として言っているわけではなくて、この工学の研究者の方がこういうことを真面目に議論するようになっていると。

それからもう一つは生命科学系の議論で、これは言わば「身体の不老不死」というようなものです。

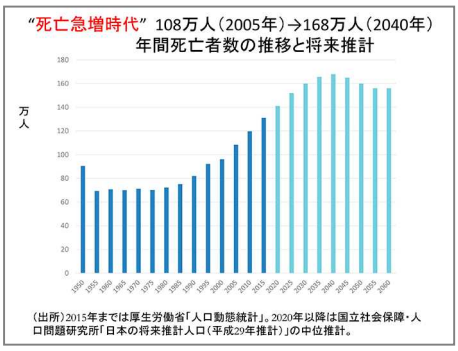
今、御覧いただいているのは、昨年出ました、もう 10 万部を超えるベストセラーになった『LIFESPAN（ライフスパン）』という本の表紙ですけれども、これはハーバード大学のシンクレアさんという遺伝学の研究者が書いた本で、要するに、老いというのは一種の病気であって治療できるんだと。そういうことを進めていけば、やがて人間は永遠に生きることができると。そこにもありますように、人類は老いない身体を手に入れることができると、こういう議論。まあ、身体の永続化ですね。

こうした方向を追求することは確かに一定の価値はあるとは思うんですけれども、私自身は、果たしてこのような意識の永続化や不老不死は人間を幸せにするのだろうかという疑問をもっています。

佐野洋子さんの『100 万回生きたねこ』。これは読まれた方も多いかと思いますけど、100 万回生きてもなお満足することができなかった猫がある雌猫との出会いを通じて深い充足を得て最後亡くなるというストーリーです。つまり、結局、人生の意味というのは決して量的な長さではないんだというような一つのメッセージが含まれているものかと思います。

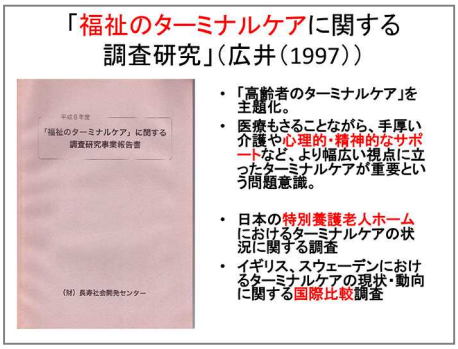
これは、より広い文脈で考えますと、「有限性」ということを私たちがどう考えるかというテーマにつながってくると思うんですね。今言いましたような人生の有限性、それから、実は今、気候変動とか温暖化の中で、環境とか私たちの生きる生態系の有限性、人間の経済活動がこれを超えるまでに至っているというようなことがあって、要はこの「有限性」というテーマに現代社会というのは向き合っているということが言えるかと思います。

一方、視点を変えると、これは既に第１回目でも話題になっていたかと思いますが、まさに高齢化ということで。「死亡急増時代」というのは縁起でもないような言い方にも聞こえるかもしれませんが、人間は全てやがて死ぬということで、高齢化が進んでいくと、年間に亡くなられる方の数が増えていく。今 140 万人ぐらいですけども、これがさらに増えていくということで、ある意味では、高度成長期のような時代に比べて、この「死」というものがいろんな意味で身近なものになっていると。私自身も含めて、そういう状況があるかと思います。



そういった中で「死生観」ということをちょっと考えてみたいと思うんですね。

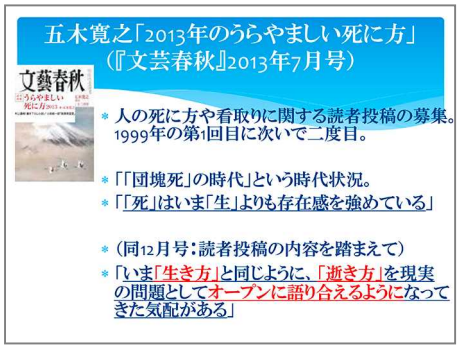
私も今年還暦を迎えましたので昔話をしているような感じで恐縮なんですが、1990 年代ぐらいから看取りに関する調査研究なんかも行ってきました。



これは 1997 年に行った「福祉のターミナルケア」に関する調査研究で、当時、ターミナルケアと言うと、がんの末期の話が中心だったのですが、高齢者のターミナルケアが重要ではないかということで国内の老人ホームとか海外の状況の調査を行って、医療もさることながら、手厚い介護や心理的・精神的なサポートなど、ちょっと広い視点に立った看取りの在り方が重要ではないかという関心で行った調査です。ただ、この頃は、私の印象では、タブーとまでは言わずとも、こういうことはあまり正面から議論されていなかったように思います。

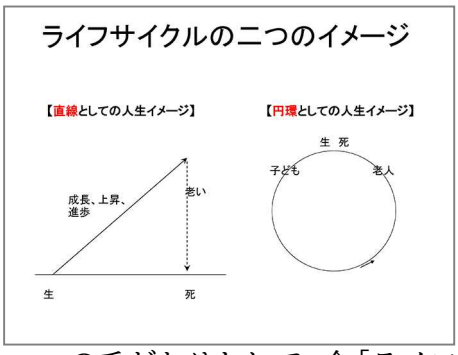
それが、だんだんこのようなテーマがいろんな形で議論されるようになってきたと思います。この石飛先生というのは、病院を辞められた後、老人ホームで働いておられた医師の方ですが、「平穏死」という言葉を出されました。これは、2010 年ぐらいでしたか、ベストセラーになって、「安らかな看取り」というようなことで、こういうことがだんだんいろんな形で議論されるようになってきたと思います。

それから、これは、ちょっと面白いというか、作家の五木寛之さんが『文芸春秋』で「2013 年のうらやましい死に方」という、ちょっとユーモアを交えた言い方ですけれども、読者の投稿を踏まえて五木さんがコメントしているような内容の企画です。五木さんに言わせると、今、団塊の世代が死を迎えて、「『団塊死』の時代」「『死』はいま『生』よりも存在感を強めている」と。そしてもう一つ面白いのが、1999 年に似たような読者投稿の企画をされたそうなんですけど、そのときに比べて大分雰囲気が変わってきたということをこの時点で五木さんは言われているんですね。それは、ちょっと語呂合わせみたいな感じですけど、「いま『生き方』と同じように、『逝き方』を現実の問題としてオープンに語り合えるようになってきた気配がある」と、そういうことを語られています。



ただ、これは私自身がずっと思ってきたことですけれども、先ほど来から出てきます「死生観の空洞化」。高度成長期を中心に、とにかく経済や人口が増え続けてきた時代というのは、死というようなことについて正面から議論するというよりは、良くも悪くも、物質的な豊かさを追求するという傾向が強かったと思います。それが今、団塊世代が高齢期を迎えたり、それから、授業やゼミなどでこういったテーマを取り上げると、割と学生や若い世代もかなり関心を持っているというような感じを持ってきました。あまり公の場では語られない分、アニメや音楽がそういったテーマを扱っていたりですね。ですから、こういったテーマをまさにいろんな形で議論していくことが大事かと思いますし、それは先ほど言いましたような高度成長の時代から経済の成熟化の中でこういったテーマも視野に入れて正面から考えていく。「『着陸』の時代」というようなことを書いてますけど、そういうこととも通じるのではないかと思います。

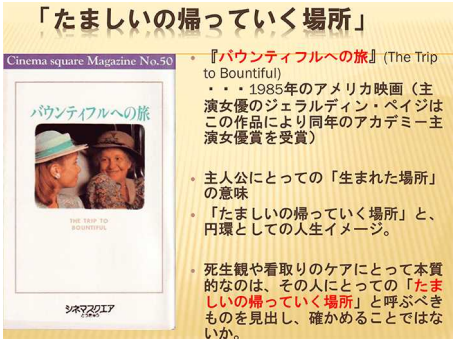
では、「死生観というのは一体何だ？」ということになってくるわけで、これはいろんな言い方ができるかと思いますけれども、一つの言い方としましては、そこに書いておりますように、「私の生そして死が、宇宙や生命全体の流れの中で、どのような位置にあり、どのような意味をもっているか、についての考えや理解」とでも言えるようなものかと思いますし、以前から言われてきたような「私はどこから来てどこへ行くのか」という問いに、一定の答えといいますか、展望を与えてくれる、そういうことではないかと思います。



一つの手がかりとして、今「ライフサイクルの二つのイメージ」というのを御覧いただいてますが、人生のイメージをどういうふうに捉えるかということです。これはいささか単純化したものですけども、「直線としての人生イメージ」「円環としての人生イメージ」というふうにしてます。

「直線としての人生イメージ」というのは多くの人が抱くものかと思いますけども、人生というのはある意味で上昇・成長していく一つの線のようなもので、ただ、この見方だと、どうしても老いや死というのがややネガティブなものとして考えられてしまう面があると思います。

もう一つ、右にありますのは「円環としての人生イメージ」。これは、人生というのは生まれてから子ども、大人、老人の時期を経て、大きく円を描いて元の場所に戻るようなものだと。左のものと違うのは、生と死が隣り合わせの場所、同じ場所に位置しているということと、あと子どもと老人の位置というのも、左では対極に位置しているのが、右の人生イメージだと、むしろ近い存在になっているということが言えるかと思います。



この「円環としての人生イメージ」というのを私が割と具体的なイメージとして持つようになった一つの映画があります。これは『バウンティフルへの旅』という 1985 年のアメリカ映画なのですが、実は主演のおばあさんを演じたジェラルディン・ペイジという人はこれでアカデミー主演女優賞を受賞しています。

これは非常に印象深い映画でして、簡単に言いますと、主人公の女性は 70 代か 80 代ぐらいで、死ということをそろそろ意識し始めている。それで、このおばあさんにはどうしても実現したい一つの願いがあって、それは、今はアメリカの南部の町なかで息子夫婦と暮らしているんですけれども、自分が生まれ育った場所、今はちょっと田舎のほうの草原のようになっている場所をもう一度訪れて確かめたいと。そこがバウンティフルという地名で、それでタイトルも『バウンティフルへの旅』というふうになっているんですが、このおばあさんは、息子夫婦の目を盗んでグレイハウンドという長距離バスに乗って、バウンティフルに向かっての旅に立つと。その中で自分の人生をいろいろ振り返ったり、最後はバウンティフルに着いて感慨にひたっているところをおばあさんがいなくなって大変だということで息子夫婦が追いかけてきて捕まったというか、それでまた家に帰ってくるという話です。ここで、このおばあさんにとっての生まれ育った場所というのは、まさに先ほどのライフサイクルのイメージの円環的なイメージと非常につながってくるのではないかと。言い換えますと、「たましいの帰っていく場所」といったものを見つけるということが、私なんかからしますと、死生観や看取りのケアにとって重要なことではないかと。

今、映画の話をしましたけれども、これは取り立てて難しい話ではありません。今御覧いただいているのはある授業での学生の小レポートの一部です。「ターミナルケアにおける『地元』の重要性」ということで、ターミナルケアと死生観について、若いうちから「どう死ぬか」を考えておくことが必要で、「地元」という場所が重要ではないかと。そこの下のほうに、「『地元』と呼べる場所を失わない限り、そこが各人にとっての還っていく場所であり、心が休まる場所であり、還っていくコミュニティとなりうるのではないだろうか。」「日本人が望む『安らかな死』というものには、このような還るべき場所（自分が居てもいいと周りに認められている場所）にいるのだという安心感が必要となってくるのではないかと考える。」と。この「看取り」「死生観」の話を「地元」ということと結びつけて語ってますけれども、これは確かにそのとおりではないかというふうに思います。

日本人の死生観　ーその3つの層ー

	特質	死についての理解／イメージ	生と死の関係
A..“原・神道的”な層	「自然のスピリチュアリティ」	「常世」、「根の国」 ・・・具象性	生と死の連続性・一体性
B.仏教（・キリスト教）的な層	現世否定と解脱・救済への志向	浄土、極楽、涅槃等（仏教の場合）、永遠の生命（キリスト教の場合） ・・・抽象化・理念化	生と死の二極化
C.“唯物論的”な層	“科学的”ないし“近代的”な理解死	死＝「無」という理解	生＝有 死＝無

ここからさらに進んで「日本人の死生観」ということについても少し考えてみたいと思うんですけれども、一つの整理ですけども、幾つかの層があるのではないかと思います。特に、戦後といいますか、高度成長期に強くなったのは一番下、「“唯物論的”な層」というふうにしてますけども、「生は有で、死は無である」と。これが現在は、良くも悪くもといいますか、支配的な死生観かと思います。

ただ、その根底には「仏教的な層」。これは、浄土とか涅槃というような形で、死というものを何らかの形である種の概念として捉えるようなもの。

さらに、その底には、「原・神道的」というちょっと難しい言葉を使ってますけども、自然というものを非常に重視して、その自然の中に「生と死」「有と無」を超えた何かを見出すような、そういう死生観があるのではないかというふうに思います。

「自然のスピリチュアリティ」というのはちょっと理屈っぽい言葉で恐縮です。スピリチュアリティというのは日本でやや誤解されることもありますけれども、これは

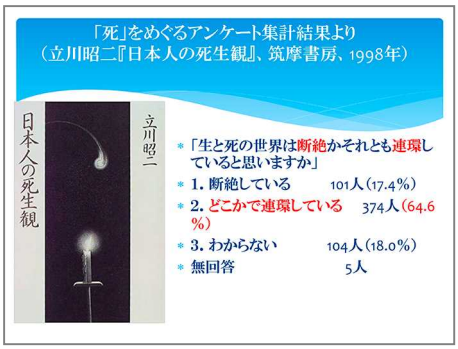
ＷＨＯの健康の定義の議論でも出てくるもので、「有と無を超えた何か」とか「生と死の根源にあるもの」、それが自然そのものの中に存在しているという死生観といいますか、私自身はこういった「自然」というのがかなり日本人の死生観にとって大事ではないかと思っています。

これはちょっと身近な話になってしまうんですけども、10 年ちょっとぐらい前に亡くなった父親が、もともと農家出身ということもあって、定年後に郊外の農園で野菜を作るのを一番の生きがいにしておりまして、そこを「還自園」というふうに名づけてました。「還自園」というのは、その文字のとおり、「自然に還る園」ということで、これは農作業をすること自体が自然と触れ合うという意味合いと同時に、恐らく亡くなってから自然に還るというような意味合いも含んでいたのではないかと思ったりしています。

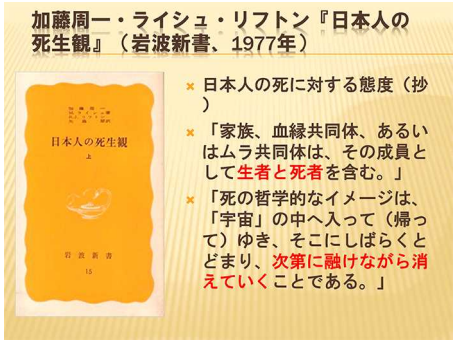
お話の後半になりますけれども、「生と死のグラデーション」ということについて今までのお話の延長でまた少し考えてみたいと思います。

「生と死のグラデーション」、これは、最初のほうでもちょっと申したかと思いますが、90 歳近くになる認知症ぎみの母親に接する経験から３、４年ぐらい前から感じるようになったことで、そういう母親の状態を見ていると、ある意味で半分夢の中にいるような感じがしたりすることがあります。そういうところから、「生」と「死」というのは思われているほど完全に分けられるものではなくて、そこにある種の濃淡のグラデーションのようなものがあって、どこかでつながっているのではないかと。

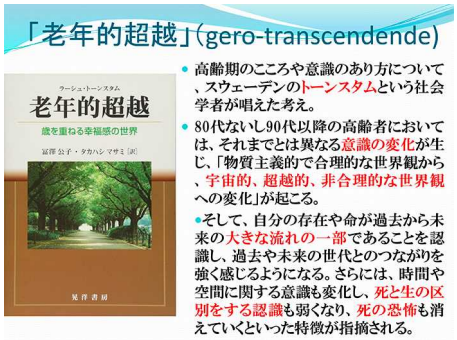
言い方を変えますと、しばらく前から「ピンピンコロリ」というような亡くなり方が望ましいというような見方や議論があるかと思います。それは私自身もよい亡くなり方の一つかと思っていましたけれども、それに限らず、「生から死へのゆるやかな移行」といいますか、こういう見方も重要ではないかと。ちょっと理屈っぽく言いますと、「生」と「死」を明確に区分して、それをきっぱり分けてきた、かつ死を視野の外に置いてきたような近代的な見方に対して、「生と死」というのを連続的なものとして捉えていく。



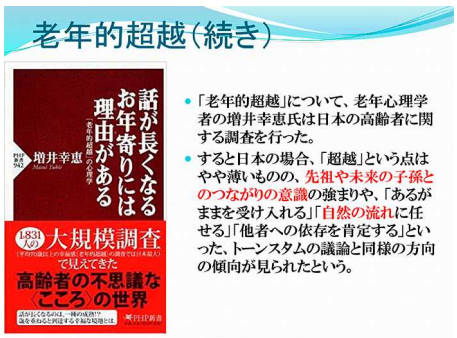
これは必ずしも特別目新しいことを言っているわけではないと思います。今お示ししてますのは立川昭二さんの『日本人の死生観』という本からの一節ですけれども、セミナーのようなところでアンケート調査を行ったところ、「生と死の世界は断絶かそれとも連環していると思いますか」という問いに対して「どこかで連環している」というふうに答えた人が６割以上を占めていて、日本人の死生観の一端を示すものであるかと思います。



それから、これはちょっと古い本なんですが、『日本人の死生観』という加藤周一さんなどが書かれた本があって、これは日本人の死に対する態度ということで、「家族、血縁共同体、あるいはムラ共同体は、その成員として生者と死者を含む。」「死の哲学的なイメージは『宇宙』の中へ入って（帰って）ゆき、そこにしばらくとどまり、次第に融けながら消えていくことである。」というような言い方をしています。



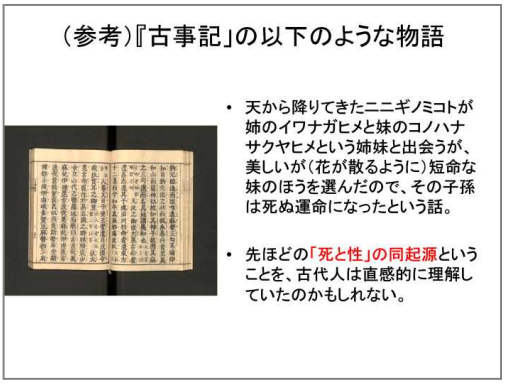
これを少し現代的な視点から見たものとして「老年的超越」という議論があります。私は、先ほどの母親との関係も含めて、あるいは自分自身も含めて、これは結構「なるほど」と感じさせる見方ではないかなというふうに思っているんですね。これはスウェーデンのトーンスタムという社会学者が唱えたもので、80 代ないし 90 代以降の高齢者においてはそれまでとは異なる意識の変化が生じて、物質的なものから宇宙的、超越的、非合理的な世界観への変化が起こると。「そして、自分の存在や命が過去から未来の大きな流れの一部であることを認識し、過去や未来の世代とのつながりを強く感じるようになる。さらには、時間や空間に関する意識も変化し、死と生の区別をする認識も弱くなり、死の恐怖も消えていくといった特徴が指摘される。」と言うんですね。確かにこういう面は、さっきの母親の例とか、いろいろ考える中であるように思います。



それを日本の高齢者の方について調査を行ったのが増井さんという心理学の研究者の方です。『話が長くなるお年寄りには理由がある』というのはちょっと面白おかしくし過ぎたタイトルのようにも感じますけども、増井さんがここで書かれているのは「日本の場合、『超越』という点はやや薄いものの、先祖や未来の子孫とのつながりの意識の強まりや、『あるがままを受け入れる』『自然の流れに任せる』『他者への依存を肯定する』といった、トーンスタムの議論と同様の方向の傾向が見られた」ということで、これも「確かに。なるほど」と考えさせられる指摘ではないかというふうに思います。

「死生観」ということで幾つかの観点からお話をしてまいりましたけども、最後は、やや哲学的というか、物すごい大きな話になって恐縮なんですが、「無の人類史」という視点について触れさせていただいて、まとめとさせていただければというふうに思います。

考えてみれば、そもそも「なぜ死というものが存在するのか」「生物はなぜ死ぬのか」という根本的なテーマがあると思います。そこに示しているのはゾウリムシの写真ですけども、「生命の進化の中で『死』という現象が生まれたのは、『性』の発生と同時である」という議論が以前からあります。例えば、ゾウリムシのような生物は分裂を繰り返して増えるので、言うならば遺伝子が変わることもないので、同じゾウリムシがずっと生きているというふうに見ることができる。それが多細胞生物になって雄と雌といった性が生まれて、遺伝子を半分ずつ交換し合って次の世代の個体が生まれる。そこで世代ごとの「個体の死」ということが初めて生じることになる。まあ、「死と性」というのが同じ起源であると、こういう見方があると思います。

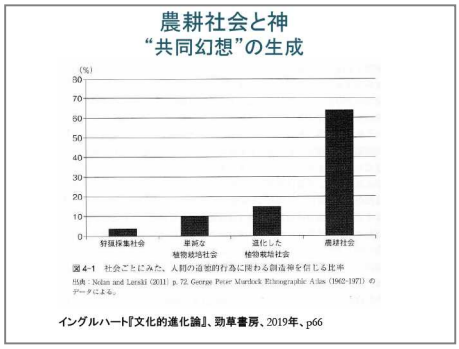


興味深いことに、『古事記』の中にこんな物語があります。御存じの方もいらっしゃるかと思いますけど、「天から降りてきたニニギノミコトが姉のイワナガヒメと妹のコノハナサクヤヒメという姉妹と出会うが、美しいが(花が散るように)短命な妹のほう

を選んだので、その子孫は死ぬ運命になった」ということですね。これは、先ほどの「『死と性』の同起源」ということをもしかしたら古代の人は直感的に理解していたということかもしれません。

そういうことで「個体の死」というのは人間が始まったときから生まれ、最初から人類にとってこの「生と死」「死生観」というテーマは非常に厄介なテーマだったと思います。

特にコミュニティ。農耕を始めるようになってから人と人とのコミュニケーションが密になればなるほど、その度合いは高まったと思います。



イングルハート『文化的進化論』、勁草書房、2019年、p66

そこで思いますのは、人間というのは死についての言わば「共同幻想」というようなものをつくって、「死は単なる無ではなく『もう一つの世界』としてある」というふうに考えるようになったのではないかと。言うならば「死の共同化」ということを行って、それを共有することで「一人ひとりの死を超えた、永続する世界を創造した」ということが言えるのではないかと思います。

これはアメリカのイングルハートという研究者の研究ですけど、農耕社会が始まることで神を信じる割合というものが非常に増えて、さっきお話しした共同幻想というようなものが生まれていったということです。

このことを身近な分かりやすい形で示しているのが、上田さんが取材された「琵琶湖の湖岸で漁業を営むある漁師の男性の言葉」というもので、これは本当に印象的な言葉で、ここにちょっと紹介させていただいてます。「私はここで生まれ、ここの水を飲み、ここの食べ物を食べて、ここで育ち、ここの人々の間でこのような役割を担い、ここで老い、やがてここで死ぬでしょう。死んだら先祖に仲間入りして、盆には家族に迎えられ、そのうち氏神になり、そして自然と一体になる。それが私、ここが私の在所です。」と。まさにこれは、死の共同化ということであると同時に、それを支える世代間のバトンタッチといいますか、世代間の継承性、そういう共同の現実に支えられていた死生観であったと思います。

それが、だんだん都市化というものが進んで個人が中心の社会になってきますと、今のようなコミュニティが維持できなくなって、それに代わって、ちょっと話が理屈っぽくて恐縮ですけれども、「無」とか「死」というものを概念として抽象的に理解するようになった。ドイツの哲学者のヤスパースが紀元前５世紀頃の時代を「枢軸時代」というふうに呼んでますけど、この時代に、仏教とか、中国では儒教とか、ギリシャ哲学とか、いろんな思想が地球上の各地で同時多発的に生まれたんですけれども、「死」や「無」を抽象的な概念として捉えるものがここで生まれたということが言えるかと思います。

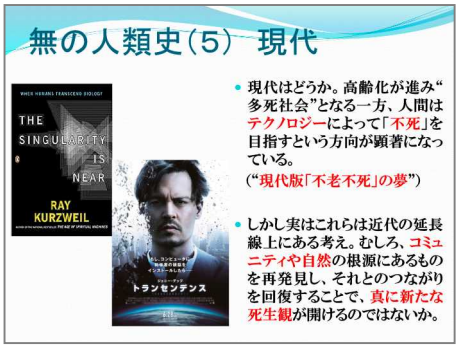
枢軸時代／精神革命における
「無」の概念化・抽象化とその比較

	関連する基本概念	現世への態度	思想の性格	風土的背景	
インド：仏教	「空」	現世否定（苦）	“宇宙原理”	森林	内在の極
中国：老荘思想	「無」	現世肯定	“人間原理”	中庸	↕
ギリシャ：自然哲学	「空虚」（原子論）				
中東：ユダヤ・キリスト教	「永遠」	現世否定（罪）	“超越者原理”	砂漠	超越の極

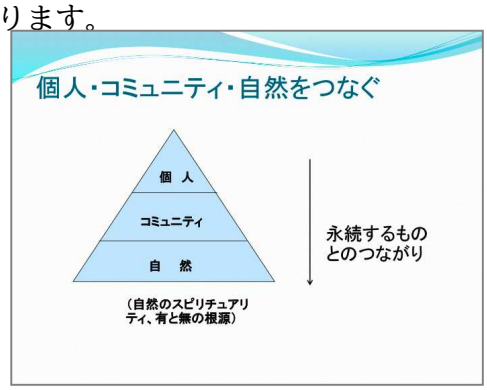
ちょっと時間の関係でその内容について詳しくお話しすることは省略させていただｚきますけれども、様々な「無」や「死」についてのある種の抽象的な概念というようなものがここで生まれたということが言えるかと思います。

さらに、それが近代という時代になりますと、「個人」というものが社会の前面に出るようになって、個人の自由というものが大幅に広がることになったわけですけれども、共同体から独立して個人が様々な活動を行う中で、ある意味では、その代償として、

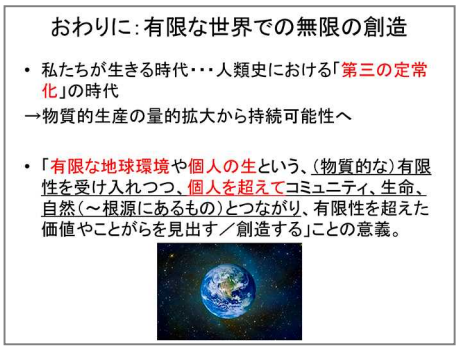
共有された死後の世界といいますか、死に関する観念を失ってしまって、言うならば孤独なレベルで「死」や「無」に向かうことになっていったということが言えるかと思います。



その先に行き着くのがテクノロジーによって「不死」を目指すということで、「現代版『不老不死』の夢」という今日の最初の話に戻るわけですけれども、私自身は、このような方向はあり得るかもしれないけれども、むしろ、そうではなくて、コミュニティとか自然、そういったものとのつながりを回復する中で死生観というものが新たな形で開けてくるのではないかというふうに思っております。



今、ピラミッドの図を入れさせていただいておりますけれども、一番上に「個人」があって、その下に「コミュニティ」があって、その底に「自然」があると。どうしても現代においては個人というのがコミュニティとか自然から切り離されていきがちなわけですけども、ある意味で、個人の生に対してより永続するといいますか、つながっていく、そういったコミュニティや自然とのつながりを回復していくことが死生観にとって非常に重要なのではないか、大事なのではないかというふうに私自身は考えております。



これが最後のスライドになります。最初のほうで「有限性」というようなお話をしましたけれども、この有限な世界の中で人間は言わば無限の創造を行っている。時代の状況を見ましても、これは説明を一部はしょることになりますけど、人類史の中でも拡大・成長からむしろ持続可能性ということに軸足を移していく社会だと。そういった意味では、この「死生観」というテーマは、地球環境とか、そういうマクロの話ともつながってくると思っています。つまり有限な地球環境や個人の生という物質的な有限性を受け入れながら、個人を超えてコミュニティとか生命、自然とつながって、有限性を超えた価値や事柄を見出す、あるいは創造する、そういうことが大事なのではないかというふうに思っております。

あと付録的に「生と死の根源」ということで関連する資料を入れたりしておりますけれども、ひとまず、非常に雑駁で、一部理屈っぽいところもありましたけれども、私からの話題提供とさせていただきます。

御清聴、どうもありがとうございました。(拍手)

○事務局(滋賀県企画調整課)

広井さん、ありがとうございました。

御聴講の皆様から既にコメントをいただき始めているんですけれども、引き続きチャットあるいは会場の紙でコメントいただければと思います。

それでは、これから出演者の皆様に議論をお願いしたいと思います。ここから先は、ファシリテーターの上田さんに進行をお願いいたします。

○上田 洋平さん

はい、よろしくお願いします。

改めまして、こんにちは。ファシリテーターを務めさせていただきます滋賀県立大学の上田でございます。

この懇話会では、簡単にまとめず、しかも散らかさずという難しい役目を預かっておりますけれども、できるだけ委員の皆様、そして今日会場におられる皆様、また視聴してくださっている皆様の御意見も酌み取れるように努めていきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

広井さん、お話、大変ありがとうございました。大きな時代の転換点を迎えている我が国の将来ビジョン、こういうことに関して広く深い御研究、それから的確な、具体的な提言をされる研究者としては、広井さんは今、日本で最も信頼される先生のお一人ではないかなと私は常々思っているところです。今日も話題提供いただきましたけれども、人類史的な視野から、死生及び死生観について大きな展望、様々なテーマを御提示いただいたところであります。

このあと前半は委員の皆さん、休憩を挟んで後半は、広井さんを含め、視聴いただいている皆さんとのやり取りを通して議論を深めていきたいというふうに思います。

まず、今の広井さんの話題提供を受けて、ちょっと感想を委員から聞きたいと思います。青柳さん。広井さんのお話を聞いてどんな感想をお持ちですか。

○青柳 光哉さん

大学の４年生で、看護学部にいます青柳と申します。

広井さん、今日は本当にたくさんのお話をしていただき、ありがとうございます。お話を聞いていると、自分の中でもたくさんの疑問が浮かび上がってきて、例えば長く生きることが幸福かというところで「ああ、確かに幸福を考えているよりも死から逃げることばっかり考えていたかもしれないな」ということであったり、あと、現代の死生観というところで「死＝(イコール)無という理解」というふうなお話があったと思うんですが、僕自身、死生観があるというのは死について考えていることかというふうにずっと捉えていたんですけど、そうではなくて、やはり「死＝(イコール)無」というふうに考えているというのが一つ現代の死生観なんだ、誰しもが持っているものなんだというのがすごく勉強になりました。その中でちょっと疑問が浮かんできたんですけど、死生観を考えること、死生観が重要であるという立場に自分も立っているなというふうに聞いてて思ったのですが、死生観を持っていないというか、死について考えない、考えたことがないという人に対して、死を考えることが何で必要なのか、どんなメリットがあるというか、どんな意味があるのか、それは何て説明していけばいいんだろうというのが一番の感想です。ありがとうございます。

○上田 洋平さん

まいったなあ、また（笑）。青柳さん、ありがとうございます。

前回の登壇で一気にこの懇話会のアイドルみたいになっちゃったんですが、今日も重要な質問をまず出してくれました。驚きました。幸福を考えるよりも死から逃げることばっかり考えているのではないか、それから、「死や死生観を考えたことのない人にそれを考えることの意味などをどう説明をすればいいか」というような質問もありましたけれども、広井さん御自身は幸福についても研究されているということですので、今の青柳さんの質問への答えも併せてちょっとコメントをいただけますか。

○広井 良典さん

幸福のテーマとも結びつけていただいてありがとうございます。

そういえば、滋賀県庁でもそういう検討を始めつつあるかと思いますけど、「幸福」というのは誰しも考えない人はいないテーマで、大なり小なり幸福になりたいというのは皆さん思うことですし、この「幸福」のテーマも今いろんな形で議論されるようになっていると思います。

それと今日の「死生観」のテーマがどうつながるかというのは、私の中ではそれは差し当たって別のテーマとしてあったのですぐに「こうだ」という簡単なお答えはできないんですけれども、先ほど青柳さんが言った「死や死生観についてあまり考えていない人についてはどうしたらいいのか」ということ、これはなかなか難しいテーマで、私なんかは割と若い頃から生きる意味とか生きて死ぬことの意味というようなことをいろいろ考えてきた人間ですが、確かにそういうことをあんまり考えないという人もいるとは思います。専ら生を充実させることに関心を向けて、死ということは別に考えなくてもいいのではないかと。まあ、それはそれで確かに一理あるといいますか、そうだとは思いますけれども、私自身は、自分自身がそうだったからかもしれませんけれども、人間はやがて死ぬわけです。それは自分自身もそうですし、自分の周りの人もそうです。やはり死というところまで含めて生きることの意味といいますか、何で自分が生きているのかということについての自分なりの考え方を持っていること、それが生きていくことのエネルギーといいますか、源泉というか、そういった源といいますか、それにつながっていくのではないかと。そして、より深い形で人生を過ごしていくことができるのではないかと思います。

私も自分自身を振り返って最近思ったりすることなんですが、自分も何でずっとそういうことをいろいろ考えてきたのかなと思うと、死生観とか、こういう死のテーマを考えることが生きていくことの充実というか、生きていくことのエネルギーにつながっていくからじゃないかと思ってます。

ですから、もしかしたら「幸福」のテーマも、それがより深い意味での幸福につながるといいますか、先ほどの『100 万回生きたねこ』の話にも一部通じるかとも思います。

この死生観の話が「幸福」のテーマともつながってくるというのはさっきの上田さんの指摘を受けて初めて結びつけて考えるようになったんですけども、それも併せて考えていくことが非常に大事かなというふうに思います。

○上田 洋平さん

ありがとうございます。

三日月さん。お願いします。

○三日月大造

広井さんの御講演を聞いて、青柳さんの御発言を聞いて思ったんですけど、有限性がもたらす無限性、有限だから無限の楽しみ、幸せを味わいたいという思い。例えば、今日のこういう場もそうだと思うんです。せっかく限りある自分の人生なんだから、御縁を大切に、自分の専門以外のことも聞いてちょっと考えを広げてみよう、引き出しを増やしてみよう。僕は、言葉にしないまでも、それが幸せにつながるんじゃないかなと聞いてて思いました。

それで、死生観を持つというところまでいかなくてもいいと思うんですけど、命あるものの死にどれだけ接するかというのが自分の感受性を豊かにするんじゃないかなと思っているところがあって。例えば魚や肉をいただく、「いただきます」と言って、私たちの命のために命あるものを、大切なものをいただきますよね。飼っている鳥が

蛇に丸のみされる、飼っている大事な家族である犬が亡くなる、飼っている虫が死んで動かなくなる。体は動かなくなるんですけど、何か動く心がある。だから、前回の第１回のときにも「死は終わりじゃない」とどなたかがおっしゃってたんですけど、死生の空洞化からの共有化、空洞化しているからこそ共有したい、共有しなきゃみたいな動き、その動きに何か期待するところがあるなと、今お二人の話を聞いてて思いました。

○上田 洋平さん

ありがとうございます。

御聴講の皆さん、あるいはほかの委員さんもいろんな質問などがあるかと思いますが、それはまた後半のフリートークのところで拾いながら議論を深めていきたいと思います。

さあ、ここからは委員の皆さんから御発言いただきながら、またキャッチボールしながら議論を深めていきたいと思います。

広井さんの話の中でいろんなテーマを出していただきまして、全部扱っていければというふうに思うんですけれども、その中でも「死生観の空洞化」「死生観の再構築」というようなことを中心に今日のこの場ではお話をしていければと思います。

まずは、現状はどうも死生観が空洞化しているのではないか、そういう現象があちこちであるのではないかというような観点からお話を始めていきたいというふうに思います。

委員の皆さんの中で、例えば楠神さんは介護という観点から具体的に死生あるいは死生観が空洞化しているというようなことを感じられるところはありますでしょうか。あるいは、それについて思われるようなところを伺ってみたいと思いますが、いかがでしょうか。

○楠神 渉さん

はい、ありがとうございます。

広井さん、今日はお話を聞かせてもらってありがとうございました。

今、死生観の空洞化について何か具体的にありますかということで、ありがとうございます。

今日、広井さんのお話の中でありました「ターミナルケアにおける『地元』の重要性」という学生さんのレポート、これがまさしく言えているんじゃないかと思います。そこでは、自分の還るべき場所というものを見失ってしまえば満足な形で死を迎えることができないのではないだろうかと。学生さんがこんなことを投げかけておられるんですね。

実際、私もケアマネジャーをさせてもらう中で同じようなことを考えることがあります。ふだん生活する中で、新聞やドラマ、もしくは関係する方の葬儀に参列する中で死というものには向き合う機会がたくさんあるんですけども、実際、自分のおじいさん、おばあさん、もしくはお父さん、お母さん、そういった自分に近いところで死に向かい合って考える機会が実は少ないんだなというようなことを感じています。

具体的に言うと、例えば私が経験した中では、少し前ですけど、80 代半ばの女性の方。中度の認知症がありまして、ちょっとお話が難しかったり、お食事を一人で食べるのが難しかったり、またおトイレなんかも少しお手伝いが必要な方だったんですけども、息子さんとその奥様、また次女さん、三女さんが協力して生活をされてました。往診の先生も来てくださっていて、命に関わるようなお話をしたことはなかったんですが、今ぐらいの季節、ちょうど夏場の暑いときに急に体調を崩されてしまって、慌てた奥様が救急車を呼んで救急搬送されました。

病院に着くと、そこに長男さん、そして次女さん、三女さんも来られまして、私も同席してたんですけども、軽い脱水くらいかなという気持ちで行きましたら、先生がおっしゃるんですね。もう命に関わる状態になっておりますと。そして、透析なんかもしないと、あと２日間ぐらいの命しかありませんと。もうみんな驚いているんですね。家族全員が。それまでそういうお話をしたことがなかったので。その場で先生は長男さんに「どうされますか？」と。もう静まり返っているんです、病室は。もう今返事しないといけない。その中で長男さんは、大切なお母さんですから少しでも長くなるんだったらいろんな治療をしてほしいとおっしゃって、治療が開始されました。それはそれで長男さんの気持ちとしてよかったんだと思うんですけども、自分のお母さんにそうやって延命治療を求められるような場面があったときにどういうふうなことをするのがお母さんの本当の思いであるのか、御家族の思いであるのかみたいなことをそれまでにしゃべる場があれば、もしかしたらですけども、違う選択をされるということもあったのかなと。

私もそのときに、せっかく往診の先生も来てもらっていたので、ケアマネジャーとしてどうしてもう少し前にそういった相談をすることができなかったのかなとか、ちょっとそんなことを思っています。

だから、空洞化ということに関しては、死とか生、特に死について、何となく自分は、よく知っているというか、誰にも死が訪れることは知っているんだけども、それを自分のこととして、家族のこととして考えることが少なくなっていると。そして、ある日突然それを突きつけられる。それが今現状あるような気がしております。

ちょっと簡単ですけど、聞いて思ったことです。

○上田 洋平さん

はい、ありがとうございます。

そういう意味では、空洞化というより、ある意味、落とし穴みたいな、「どこかにあるのは分かっているけど、今だったか」みたいな、すこんとはまってしまう。

越智さんに少し聞いてみたいと思います。今のつながりで言うと、その選択を突きつける側と言うと変ですが、「どうしますか？」と聞く側の医師という立場からはいかがでしょうか。越智さんは、前回「死の種類」ということも言っていただいてますよね。みんながイメージする死と、もう一つ、いろんな死があるよと。ちょっとその観点から、あるいは今の楠神さん、広井さんのお話も受けて、いかがでしょうか。

○越智 眞一さん

選択を迫る場というのは救急の場。本当にそういう選択を迫るのは救急の場だと思います。それはもうどうしても生かさなければならないという立場ですので、「どうしますか？」という問いかけになると思います。これはもう、職務柄、仕方のないことだろうと思います。機械的に聞かなければならないことというふうになされております。

それで、死生観の問題なんですけれども、今、アドバンス・ケア・プランニング、要は元気なときから死について考えましょう、死に方について考えていきましょうというような動きになっています。

ただ、人が死というものを意識するのは、自分が病だと宣告されたときからなんですね。それまでは、ずうっと生きていると。生きているという実感もないかもしれませんけれども、死というものは全く前提にない。「たとえ肉親が死んでも私は別だ」というような感じで捉えられている方が多いように思います。あるいは、自分より年下の人が亡くなったときに初めて死というものを意識していかれるような気がします。

そういう意味では、そういうときから改めて死というものを考え出して、いろいろ結論を出していかれるんだろうと思います。そういうことが起こったときにその方が何か書き残す、それから家族でお話をされる、そういうことが必要なんじゃないかというふうには思いました。

それから、死の種類なんですけれども、我々、死亡診断書を書くときに 12 項目あるんですね。自然死と事故死、不慮の死、そういうような大まかな分け方になっていくわけなんですけれども、今論じられている死生観というものが生きるのは自然死のみなんですね。不慮の死である、事故死である、災害死である、そういうものについては全く論ずることができないのは当たり前なんですけれども、そういう死もあるんだということはこの死生懇話会で議論するに当たって重要な問題だろうというふうに思っております。

ちょっと取り留めのない話になってしまいましたけど。

○上田 洋平さん

ありがとうございます。

死生観をずっと考えてきて、それが発揮できるというか、生かされるのは、実は 12 種類ある死の中でも、自然死みたいなときなんじゃないか。事故なんかのときはすこんと一気に亡くなってしまう、そこは私たちも認識しておかなければなりませんね。

もうお一方、打本さんにちょっとお伺いしておきたいと思います。いかがでしょうか。

○打本 弘祐さん

広井さんのお話を受けて「死生観の空洞化」というところで私が思ったことは、広井さんと同じになるんですけども、私は学生さんに仏教を教えていますけれども、学生さんのほうがいろんなアニメ、例えばジブリであるとか、それから音楽の歌詞なんかから自分なりの死生観、「亡くなったらこうなる」ということを訴えてくるケースが多いような気がいたします。確かに空洞化ということはあるかもしれませんが、ある意味、物すごく細い線のようなものは割と持っていらっしゃるような気がしているんですね。

その中で、個人的にお話を聞いていくと、個々に持っている学生さんの線、死生観の線みたいなものがどんどん太く、しっかりしていくようになるというような経験をしたことがあります。具体的には、亡くなった後どうなるか分からないと言っていたけれども、だんだんと聞いていくと、ある程度の世界観を持っていたり、死んだ後に家族を見守る存在になるんだといったことを真面目にしっかりと答えてくるような方が結構いらっしゃるなというのを思っています。

そうした死生観の背景には、音楽とか、様々な文化があるわけですけれども、講義を聞いていく中で、それが実は仏教であったり宗教に源泉があるというようなことに気がついていって、「飢餓感」というふうに広井さんが書いていましたけれども、割と貪欲に学んでいくようなケースがあることに気がつかされました。

また、先ほど施設でのお話がありましたけれども、私自身は大学におりますが、臨床宗教師として施設へ行くことがあります。その中で、浄土真宗の作法なんですけれども、お参りをすることがございます。そこでは、お参りという弔いの儀礼をするときに様々な宗教・宗派の方、利用者の方が集まってこられるんですね。そこで皆さんにそれぞれお話を聞いていくと、「自分は何々宗なんだけれども、実は今日は誰々の命日だから亡くなった方のために来たんだ」、「自分は亡くなったらあちらの世界に行くから、今日はそのことを思いながら参らせてもらった」ということをよく聞くことがあります。

今の２つのお話はちょっと世代がばらばらに感じたと思うんですけれども、私の中では、死生観の空洞化にも世代によるグラデーションのようなものが実はあるんじゃないかなと。とても年配の方、高齢の方の中には割としっかりとお持ちの方もいらっしゃるし、学生さんのような若い方でも何か気づいて自分の中で問いを深めている方、自分なりの答えを持っている方、そういう方もいらっしゃるような気がするんですね。広井さんの中でそういった世代間の違いみたいなことが何かあるかなというようなことを逆にお尋ねしたいところであります。ちょっとうまく言えませんが、よろしくお願いします。

○上田 洋平さん

ありがとうございます。

今、楠神さん、越智さん、そして打本さんにお話しいただきましたが、広井さんはどんなことをお考えになりましたでしょうか。

○広井 良典さん

はい、ありがとうございます。それぞれ非常に考えさせられるというか、印象深く伺いました。

後のほうからになりますけれども、打本さんが言われた「世代によるグラデーション」というのは、実は私自身もかなり強く感じてきたことです。もちろん世代で全て割り切れるものでは決してなくて、個人の差が大きいとは思うんですが、これは1990年代ぐらいから割と感じてきたことで、ちょっと大ざっぱな言い方ですけど、私よりちょっと上の団塊の世代前後の方というのは、概して、高度成長期で、とにかく物質的な豊かさを大きくしていくことに関心のある方が多かったので、どちらかというと、死生観とか自然な亡くなり方というようなことにはやや距離を置く傾向がある。逆に、もっとさらに上の世代とか、先ほど打本さんがおっしゃられたように、学生とかと接する中で、若い世代ですね。つまり、ある程度物質的な豊かさが実現された後の社会で育ってきて、あまり死生観みたいなことについては学校とかでは直接聞くことがなかったんだけれども、「何で今生きているんだろう？」みたいな関心が生まれている。ですから、世代間のグラデーションということは私自身割と感じてきたことで、まさにそれは日本社会の変化といいますか、日本社会が経験してきた時代をそのまま反映したものではないかというふうに思います。

とはいっても、さっき言いましたように、実際には個人の差が大きいので世代間という軸だけで決して説明できるものではないと思います。また、さっき団塊世代の方と言いましたけど、皆さん高齢期を迎える中で、何らかの意味で、死生観といいますか、人生全体を総括するようなことへの関心は高まってきていたり、中にはコンビニで見かける週刊誌でも毎週のように亡くなり方についての記事がたくさん出てたり、そういう意味では、このテーマに対する関心が全体として高まっているのが今の日本全体の状況としてあるのではないかなというようなことを思ったりいたします。

それから、楠神さんのおっしゃられた「地元」の話、あと突然突きつけられるという話。そういう意味では、やはりこのテーマはできるだけ早い時期から考えといたほうがいいのではないかと思いますし、これは私のもともとの考えなんですけど、亡くなる前の１週間とか１か月とか、ある期間だけを切り離して考えるのではなくて、人生全体の中で看取りを考える、人生全体に対する視点というのが重要なのではないかなというふうに思ったりしております。

それから、越智さんがおっしゃられたことはまさにそのとおりで、死の種類によって死生観の意味というのはまた全然異なってくると思います。それは全くそのとおりです。ただ、それを超えて、どのような死を迎えるにしても、このテーマは何らかの形で考えておくのは一定の意味があるのではないかなというふうにも思ったりします。

○上田 洋平さん

ありがとうございます。

学生さんの話が出てきたから、青柳さんにちょっと。今、皆さんのお話を聞いて、新たに何か思われたことはありますか。

○青柳 光哉さん

広井さんが「生と死のグラデーション」というお話をされていたとき、前回越智さんが交通事故などで亡くなる方の話をされていたのをすごく思い返しました。突然亡くなってしまったとき、生と死のグラデーションはどのようにイメージしたらいいんだろうなということを考えたのですが、先ほど自然死以外でも死生観はそれぞれ違うのではないかという話を聞いて、もっとそれについて考えてみたいなというか、自然死ではないところで考えていく必要が確かにあるのではないかなというのをとても思いました。

すいません。大ざっぱになってしまうんですが。

○上田 洋平さん

はい、越智さん。

○越智 眞一さん

今、この会で話されているのは、亡くなられる方、御本人の話になっていくんですね。でも、突然の死、不慮の死で一番大切なことは、当然亡くなられた方のことは非常に大事ですけれども、大事な方を失った人たちのケアが必要になっていくんです。その人たちの中で、突然この世から消えてなくなった人たちがどう活きていくか、どう活かされていくかをケアしていくということが非常に大事なことなんですね。

もう一つ言えるのは、長期戦の、自然経過で亡くなっていかれる方。介護・看護が長々と続いていくと、今度はそれに当たっている方の疲労というのがあるんです。僕は、長いこと見ていますと、これは非常に医者としてクールに言わせていただきますけれども、3週間ぐらいが限度です。それを超えてくると、やはり心の奥底、それからお話をされる言葉の端々に「まだですか？」という言葉が出てくる。それはもう否めない事実です。当然、疲労があるわけです。そういう方の中でその死にゆく方をどう生かしてあげるか、そういうことが必要なんです。

先ほども「離陸から着陸の時代」とありました。僕らは「ソフトランディング」という言葉を使いますけれども、みんなが納得して、御本人も苦しむことなく旅立たれるように演出するのが医者の役目、最後の役目になっているということ、それだけはちょっと追加させていただきたいというふうに思います。

○上田 洋平さん

はい、ありがとうございます。

そうですね。そういう意味では、その人の人生全体を見るということも必要ですし、終末の時期に差しかかったときに誰がどういうふうに伴走して寄り添うか。その距離がどれぐらいの長さになるのかということはそれぞれあるかもしれませんけれども、そういう観点からも考えていく必要があるということをまた御提起いただいたところであります。

さて、小一時間たちましたので、一旦ここで休憩を入れまして後半に移らせていただこうと思います。今日は、視聴していらっしゃる方から、あるいは会場の方からも質問等をいただいております。委員のみんなで話しているだけじゃなくて、そういうのもちょっと拾いたいなと思うので少し早めに休憩を取らせていただいて、それを見ながらまた議論をしていく後半戦に入っていきたいというふうに思います。一旦ここで休憩を入れたいと思います。

○事務局（滋賀県企画調整課）

それでは、約10分間休憩とさせていただきます。今、既にいただいたコメントを会場のホワイトボードに貼り出していっております。休憩中、それを映させていただこうかと思いますので、オンラインの方も御覧いただければと思います。

再開は3時半からとさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

それでは、休憩させていただきます。

【休憩　約10分】

○事務局（滋賀県企画調整課）

それでは、再開させていただきます。

前半に引き続き、上田さん、よろしくお願いいたします。

○上田 洋平さん

はい、ありがとうございます。では、後半に移りたいと思います。

まだ御発言いただいていない委員の方もいらっしゃいますので、まずは、そのお二人に聞いていきたいと思います。今、休憩中に、皆さんからいただいた質問等を見せていただきまして、ちょうどお二人の委員さんに絡めてお聞きしたいなというようなこともありましたので、それを紹介しながら話を始めてみたいと思います。

「死生観の空洞化と再構築」が今日のテーマだと申し上げましたが、例えば、いただいた中に、「リアルの『死』を知らない子どもに伝える難しさがあると思います。」というご意見があります。空洞化とか再構築と言っても、なかなか難しいんじゃないかと。そういう意味で、藤井さんは「デス・エデュケーション」というようなことを前回キーワードとして出していらしたかと思います。また、ミウラさんは、日々、死への願望というか、そういう思いを持っている子どもたちと向き合ったりしている。一体その子たちは死というものをどれぐらいリアリティーを持って感じているのかというようなことも私自身気になりましたので、まずお二人の委員にこの「リアルの『死』を知らない子どもに伝える難しさがある」という御意見についてお考えをお聞かせいただきたいと思います。これは死生観を再構築する上でも非常に重要なテーマかと思います。

では、まず藤井さんからお願いできますでしょうか。

○藤井 美和さん

こんにちは。関西学院大学で死生学を教えています。学生に対しても生きること、死ぬことについて何らかの問題意識を持ってもらいたいと思いながら関わっております。

リアルな死を教えることは、やっぱり難しいですよね。これは、恐らく今の状況の中では誰もが感じていることだと思います。

私が一つ思うのは、前回も言いましたけれども、リアルな死を教えるという「死」に焦点を当てると「死とは？」という話になってしまって、そこに関心を持てない人が出てきます。逆に、生きるのがしんどくて死にたいという人も多いんですよね。今、自殺は10代が増えています。「死生観」とか「死とは？」という哲学的な関心は持てなくても、「苦しいから死んでしまいたい」あるいは「自分は何のために生きているんだろう？私がいなくたって別に世の中何も変わらないし、私が死んだって誰も悲しまない」と思っている若い人たちもいるんですね。だから、死そのものを教えるというふうになっちゃうと、ものすごくハードルが高くなってしまうんじゃないかと思います。

そういう意味では、死を考えるということの意味がどこにあるのかを考えることが大切です。これも前回言いましたけれども、「あなた、もう死が間近ですよ」と言われたときに「残された時間をどう生きようか」となる。つまり、死が迫ってくることによって

生きること、いかに生きるかというのが大きなテーマになるわけですよね。あるいは、生きることに意味が見いだせないから死んでしまおうというふうにもなるわけです。つまり、生と死はつながっていて、「リアルな死が見られないから、死を考えていない」かというと、そうではないと思っています。

先ほど広井さんが「学生は結構関心を持っています」とおっしゃいましたし、打本さんもそのようにおっしゃいました。私も同じように感じています。実は、「死とは？」という話ではなく、生きる苦しみだったり、死を目前にしたときにどんなことを思うかだったり、そういうことは若者がとっても関心を持っているテーマなのだと思うんですね。

いろんなところに目を向けると、死にたいと思っている人は結構、周りにたくさんいたり、一方で、高齢のおじいちゃん、おばあちゃんに会いにも行かないという若い人たちもいるわけなんですね。そこに何かきっかけを与えるのが教育の役割かなと思っています。

私は、「一般的な死」と、死を三人称的に捉えると、なかなか捉えにくいので、死生学の授業の中では、例えば自分が病気を持っていたり、自死で家族を亡くした方だったり、あるいはホスピスで死にゆく人を看取ってきた方だったり、そういった当事者や二人称という方に来ていただいて、お話を聞かせていただいています。今身近にない環境を授業の中に持ってくるということは、一つ大切なことではないかと思ってやっています。

そして、学問的に三人称的な学びをして、二人称的な当事者や関わっている方のお話を聞いて、授業の最後には自分が亡くなっていくという一人称の体験として「死の疑似体験」というワークショップを、もう20数年やっています。これが長いか短いか分からないですけれども、自分が亡くなっていくということを疑似的に体験する。それはがんになってという設定にしていて、亡くなっていく過程で大切なものを手放していくという体験です。その後、振り返りを書いてもらうんですが、この20数年、あんまり変わらないんですね。これは、命に対する本質的なところが変わっていないという所が大きいんじゃないかと思っています。

まず、亡くなっていくプロセスで大切なものを手放していくんですけれども、最後に残っていくものの中で圧倒的に多いのはお母さんなんですよね。母親。これは、実際のお母さんというのももちろんあると思うんですけれども、それだけじゃなくて、自分を無条件に受け入れてくれるというか、いつも支えてくれる存在というものの代表として挙げられているんじゃないかと、私自身は捉えています。

また、ほかにも愛とか信頼というものがあります。愛というのは愛情という愛ではなくて、自分をここに生まれさせてくれた大いなるものに感謝したいとか、愛し愛されるということの中にすごく大切なものを見いだした、というものだったり。あとは、自分は一人で生きているから自分なんか死んだっていいと思ってたけれども、自分自身が死んでいく体験をしていく中で「ああ、実はいろんな人に支えられてたんだ。一人じゃなかったんだ」ということに気がついて、自分が死ねばいいと思ってたのはちょっと違ったかなと思うような学生もいます。それはもう、この20年間、毎年みられます。

もう一つ大きなものは、今日の広井さんのお話にもつながるんですけれども、「生かされている」ということを書く学生がとっても多いんですね。つまり、生きてたと思ってたんだけど、実は何か生かされて今ここにあるんだというふうに思えたと。言葉の使い方は様々違いますけれども、そのようなことを書いている学生も多いです。

また、先ほど幸せという話も出ましたけれども、自分が幸せかどうかということを考えてきたけど、今もうここにいて普通に生活していることが幸せだったんだということに気がついたという学生はとても多いですね。

ですから、「これがリアルな死ですよ」とリアルな死を教えるというのは、今は在宅死が多くはなってきているものの、なかなか難しいと思うんです。でも、死というのは「いかに生きるか」とセットになっているから「死にたい」が出てくるわけなんですね。ですから、そういった「生き方」のところか

ら、一人称として、自分の問題として、あるいは本当に自分の友達が苦しんでいるとか、そういった問題として捉えることによって、死そのものの見方が、「遠い死を考えましょう」ではなく、もっと身近なものとして、自分に引き寄せて考えられるんじゃないかなと考えています。

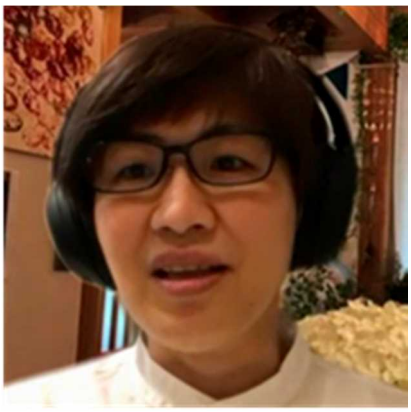
○上田 洋平さん

ありがとうございます。

キーワードをいろいろ出していただきました。三人称から二人称、そして一人称へという段階を経て、自分に引き寄せて考えることができるようになる。それから、ワークショップをずっとされるなかで、20数年変わっていないものは「母」。つまり、無条件に自分を受け入れてくれるものの存在であるとか、愛、あるいは支えられている、生かされているということへの気づき、あるいはそういうことを皆で話し合って共有できること、こうしたことにも死生観の再構築に関してのヒントがあるように思いました。

ミウラさん、いかがでしょうか。

○ミウラ ユウさん



皆さん、こんにちは。ＮＰＯ法人好きと生きるのミウラ ユウと言います。よろしくお願いします。

リアルな死を教えるのが難しいという話なんですけど、先ほどから上田さんがおっしゃってくださっているみたいに、比較的若い年齢の人たちからの相談を今たくさん受けていまして、多くの若者たちが「もう消えてなくなりたい」と。「死ぬ」というよりも「消えたい」ということを言う人がすごく多いんですね。

消えたいというのはどういうことなのかなと思ったときに、自分の存在意義が感じられなかったり、自分が誰かに認められていなかったり、もしくは自分自身で自分を否定していたり、そういうことから起きる「消えたい」なのかなというのは感じるんですね。

私は何の専門家でもないですので、学術的なこととか、例えば先ほどからおっしゃられているような哲学的なこととか、そういうことで語るのができないんですけど、生み出す「生」として、直感というか、そういうもので感じたことをお話しさせていただくとすると、今やっぱり社会背景的なものがとてもしんどくて、幼いときから優とか劣があって、勝つとか負けるがあって、それに向かって自分は優れていないと駄目だし、勝てないと駄目。私たちの世代に「勝ち組」みたいな言葉ができて、すごく好きじゃないんですけど、その勝ち組に入れない人たちは、社会に必要なかったり、社会に居場所がなかったりする。家庭の中でも、社会に出ても、学校の中でも毎日毎日そのことと向き合いながら、ちょっと心の余裕を持って何か楽しいことをしようかなとか、そういうのを考える暇が全然ない状態でみんな生活しているので、それは普通にしんどいなと思うんですよ。「生きてるのがしんどいわ」とか「生きづらいわ」みたいなことを若い子たちがよく言うんですけど、確かに毎日毎日そんなことばっかり追っかけてたらしんどいに決まっているし、まず社会全体で、優れているものよしとするとか勝てる人じゃないと駄目みたいなことを一回休憩するというか、「みんなでやめへん？」みたいなことをしない限り、これはもうずっと続くんじゃないかなという気がしているんですよね。

それと、いつもそういう相談を受けるときに「死んだらどうなるんやろうね」「死んだら楽になるのかな」みたいな言葉がよく相談者から出るんですけど、死んだ人がどうなったかを語る機会というのはないじゃないですか。当たり前ですけど。たまにびっくり人間みたいな人、死んだと診断された

けど起き上がったみたいな人がいるかもしれませんけど、多くの人は死んだらもう語れないわけで、死んだらどうなるかなんていうことは誰も分からない。

それは生まれてくるときも同じで、自分の意思で、まあ、胎児を医学的な何かで生まれさせようとして生まれてくることはあるかもしれませんけど、そのとき自分の意思でもって「さあ、今から人間社会に生まれていくぞ。何か楽しいことあるかな」みたいになって生まれていくわけじゃない。

だから、どちらも、自分の意思がない状態で生まれてくるし、自分で選べない状態で死んでいくのがほとんどだと思いますし、それに対してどうなるとかこうなるとかの正解が何もない世界だと思うんですよ。「どう生きたら正しいんですか」というのも正解が分からないし、「死んだらどうなるんですか」というのも正解が分からない。何とも分からないことを背負いながら「生まれてきたからには、ただ生きるしかない」という状態でみんなが生きていく。それが、助け合えたり、支え合えたり、信頼できたり、それこそ愛し合えたりする社会であればいいんですけど、今それがすごく薄くなっちゃってて、「自分の意思ではなかったけど、生まれてきてよかったな」と思えることがあんまりないという気がするんですね。

その中でどうやってリアルな死を教えていくのかという話になると、正直言って、私はもう「分からない」と言うしかないというか。ごめんなさい。大人として自分でもどうしていいか、正直分からない。ただ、生まれてきてくれたこと、ここにあなたが生きていることはとても大事なことだし、大切なことだし、何もできなくてもいいから、生きてそこにいてくれることが全てだと思っているということを毎回伝えるようにしています。何かを指導するとか導くとか、理解させるとか教えるではなく、私は「隣に座って、あなたと一緒におしゃべりしてたいわ。一緒にいようね」ということを言える大人でいたいなと思っています。もしかしたら隣に座っていたことで子ども自身が、若い人自身が「ああ、こんな人もいるんだ。もうちょっと一緒にいてみようかな」と思ってくれたり、「しんどい世の中だけど、自分はこういうことが好きだからやってみようと思うんだけど、どう？」と言ってきてくれたりすると、「それ、いいじゃない。一緒にやろう。私にも教えて」とか言いながら若い人や子どもたちと一緒に生きていたいなと思うんですね。

死は決してネガティブなことではないとは思いますし、駄目なことじゃないとは思うんですけど、死んだらどうなるのかが分からないから、それは普通に怖いと思うんですよ。死に対して恐れるし。だから、そういうことを否定しないで、「怖いよね」と。「死にたくなる気持ちも分かります。死なないでほしいと私は思うけど、あなたが死にたい思いを抱えていることはとてもよく分かるし、それが駄目なことだとは思わない」というふうにして一緒にいるというか、一緒に考えるというか、正解を導き出さないのが専門的なことを何も知らない、ただただ直感で生きている私のやり方なのかなと思ってます。

何の参考にもならないかもしれないんですけど、そういうことを日々やっているかなと思います。

○上田 洋平さん

はい、ありがとうございます。参考にもならないことなんて全くないです。大変重要な指摘、提起をいただきました。

視聴者の方から、「私は現代は忙しすぎることが多いと思います。」と。これは、ミウラさんがさっきおっしゃっていたようなことにも通ずるかもしれません。「自分のことを考える時間がない」とか「ゆとりを持てる時間がない」、常に査定されたり、比べられたり、追い立てられたりという中で考える時間がないのではないかというようなこと。

あるいは、「他人の死に対してどう感じるか。」と。例えば「人身事故で電車が止まったときに、ふと私の心に『なぜ今なんだよ！』と苦々しく思ってしまう気持ちがあった」と。これは、この方だけではないだろうと思います。そして、人身事故などがあるとアナウンスは「皆さん、お急ぎ中のところを大変御迷惑をおかけします」みたいなことを言って、それを聞いて、もう何とも思わない不感症みたいになってしまっているような自

分がいることにも気づくんじゃないかと思いますが、そんな御意見もあります。

忙し過ぎるんじゃないか。比べられ過ぎている、あるいは立ち止まって考えられない。これは広井さんが先ほどの話題提供の中でも、時代の転換の中でもうそろそろそういう右肩上がり、一生懸命追いつけ追い越せじゃなくていいんじゃないかとおっしゃっていたことと通じると思います。「第三の定常化」というようなキーワードについて触れていらっしゃる人もいたんですが、広井さん、いかがでしょうか。

○広井 良典さん

先ほどの藤井さん、ミウラさんのお話、これはまた非常に印象深く、かつ考えさせられる内容だと伺ってました。

まず、藤井さんのほうは学生のお話をされて、また最終的に今日のテーマは生き方、どう生きるかという問題として捉えていくと。私、そのとおりだというふうに思いました。それから、ミウラさんがおっしゃられたのも本当にそのとおりで、今日のこの「死生観」のテーマというのは社会的なことと非常につながっているわけですよね。ミウラさんのお話にありましたように、今の社会の生きづらさというようなこととか、消えたいというようなお話もあったり。

ですから、今日のテーマは、一方で看取りの在り方といったお話であったり、今日私がお話しした「地元」とか「還っていく場所」とか「自然とのつながり」という話であると同時に社会的な話と非常に関わっていて、この死生懇話会でまさにそこまでも含むものとしてテーマを設定されたのは、そこに意味があったというふうに逆に思っています。

特に、今、上田さんが言ってくださったように、またミウラさんの話にもあったように、競争社会というか、とにかく拡大・成長を目指していくような社会の中では生きづらさみたいなのが増していっていると。ですから、死生観の話というのは、やはり社会の在り方と、そこでの人とのつながりとか、何を目指しているような社会であるのかというようなこととつながってくるということで、それが今のミウラさんの話から特にはっきり浮かび上がってきたと思います。

この死生懇話会がどこまで射程を広げるかということとも関係してくるかと思いますが、私は、社会の在り方、人とのつながりとか関係性、そこと死生観、死生の話というのはつながってくると。ここはやっぱり重要なところかなというふうに思いました。

○上田 洋平さん

そうですね。社会とのつながりということでいうと、つい先日の中日新聞の記事に、死をめぐる自由権、個人の自由、と社会権というか、そういうようなテーマで記事があったように思うんですが、その中で印象的だったキーワードがあって、「苦を抱えて生きる権利も人間にはある」と。その「苦を抱えて生きる人間」をどうやって社会として支えるか。青柳さんが最初に言ってくれた「死から逃げて生きる」あるいは「苦から逃げて死を選ぶ」、こういう個人の自由というのも最近では議論されつつある。それを突き詰めると、安楽死とか尊厳死ということになるのかもしれない。一方で、「苦を抱えて生きる人」を社会でどう支えるのか、社会の中での――「社会による自由」つまり「苦を抱えた人」が社会の中で、社会の支えがあるからこそ自由に生きられる、そういうことだってある。ミウラさんのお話はそれと通じる話だなと思いました。

さて、この会は懇話会というよりもシンポジウムみたいになってきておりまして進行が大変なんですが（笑）、御意見をいただいておりますので、できるだけ拾いながら進めたいと思います。

みなさんの御意見は全部つながっているように思うのですが、例えば、ちょっとこれは私も関心があって、今日のもう一つの重要なテーマ「再構築」の中で、「「地元」という言葉に共感します」と。しかし、「地元を持てる持てないはある意味運命であり、『地元』を持てる人は幸せなのだろうと思いました。」と。広井さんには私が取材したお年寄りの方の話を引用していただきましたけれども、かつては、「私、ここで生まれてここのものを食べてここで育って死んで、死

んでも役割があって」と、こういうはっきりとした「地元」があった。
　だけど、一方で、「『帰る場所』について、引っ越しが多く浮き草のような人生でした。夫や自分の親の墓に入りたくない私が、夫と家の近くの合祀の墓に入ることに決めたとき、なぜか心が楽になりました。死んだら愛犬にも会えるので死に怖さをかんじなくなりました。不思議です。」と、こういう方がいらっしゃる。
　この「地元」ということがかえって人を苦しめるというか、死生観を考えるときに「じゃあ、俺、地元がないじゃないか。どうしたらいいの？」というようなことがあるかもしれない。この辺についてはいかがでしょう。さっき休憩時間に越智さんから「地元」について立ち話でしたが示唆的な話をいただいていましたので、越智さん、いかがでしょうか。

○越智 眞一さん
　非常にしゃべり言葉になって申し訳ないんですけども、「地元」という言葉は、最近は使われなくなりましたけど、昔、行政は「住み慣れた場所で」という言葉をよく使っていました。僕は、逆に、その「地元」という言葉の代わりに、例えば死ぬ場所であれば「死にたいところで」と。それは御自宅であってもいいし、例えば行ったことないところ。まあ、国内に限りますけれども、北海道の原野の真ん中で死にたいんだと。もしそういう施設があれば、そこへ行って亡くなると、そういう死に場所を選ぶ自由というのもね。それが地元なんだろうというふうに考えてます。
　例えば、滋賀県が「琵琶湖が見えるところを提供しますよ」という話をすれば、全国から死にたい方が――死にたい方と言うとおかしいですね。自死希望者ではないですよ。人生の最期を終えようという方が集まってこられてもいいじゃないですか。それぐらいの寛容な心をみんなが持って、それで安らかに逝っていただく。これはもう生き方、死に方、それからその方が納得して逝かれたことによる残った方の満足につながっていくように思いますけれども。ちょっとそういう意見を持ってます。

○上田 洋平さん
　ありがとうございます。
楠神さん、何か御意見ありそうですね。「地元」ということも含めて。

○楠神 渉さん
　今日は「地元」ということを考える機会もいただいたわけですけども、私はその「地元」というのを「居場所」というふうに言い換えてもいいんじゃないかなと思っておりました。生まれ育った地元という意味ではなくて、自分が死を迎えるであろう居場所。例えば、このおうちだったら家族みんながここで最期を迎えることを許してくれるんだとか。
　もしくは、居場所というのは、死だけじゃなくて、生についても言えると思うんですね。生きる居場所。この仲間がいるからここで生きられる、そういう居場所がある。それは決して生まれ育った地元だけじゃなくて、今この仲間がいる場所というのもあるかもしれません。
　だから、生と死はつながっていると思うんですが、そこで共通の言葉として「自分が認めてもらえる居場所」「最期を迎えることを許してもらえる居場所」、そういう居場所をどういうふうに見つけていくのか、ちょっとそんなことを考えてみたいなと思いました。

○上田 洋平さん
　ありがとうございます。
広井さん、どうですか。居場所があれば、どこで死んでもいいじゃないかと。そこで長く関係を築いてきて死ぬということとはまた別の、「地元」という考え方にもいろいろ幅があると思うんですが、「地元」というのはどう考えたらいいんでしょうね。

○広井 良典さん
　私はもともと岡山が実家で、私の中ではそこが地元なんです。私は、東京とか千葉とか京都とか、いろいろ移動してきた人間なんですけど、ちょっと格好つけた言い方をすると「魂はふるさとに置いてきた」みたいな、そういう感覚を持ってきたんです。だから、心の中の地元というのはやっぱりすご

く大事だと思っているんですが、一方で、それは、先ほどのコメントにもありましたように、必ずしも普通の意味の「地元」というのに限らず、人間にとってはまさに先ほど楠神さんがおっしゃられた「居場所」ということですから、いろんな形があるというふうに思います。要するに、そこで心が休まるというか、自分が認められるというか、「そこにいてもいい」と安心できる場所ということですから、それは、ふるさととか、何か特定の場所に必ずしも限らなくて、いろんな形があるのではないかと思います。

先ほどの楠神さんのお話でちょっと印象に残ったのは、「地元」を「居場所」というふうに考えていくと、それは、死生観とか、死んだらそこに還るという話だけにとどまらず、生きているこの社会の中での居場所というような、そういう死も生も含んだ話になってくると思いますので、この「地元」とか「居場所」というのは今日のこの「死生」のテーマで結構キーワードになるような気がして伺っておりました。

○上田 洋平さん

ありがとうございます。

私がかつて地域で聞いて、今日、広井さんが引用してくださった話のなかで、地域のお年寄りが自分の地域のことを「ここが私の在所です」とおっしゃった。僕はあれを聞いたときに、「このおじいさんにとっては体も心も魂もここが在所なんだ」と感じた。こういう場所を持っていらっしゃる。しかし、ここにご意見を下さった方のように、体はここにある。しかし、心、魂はそれぞれみんな、切り身になってと言うと変ですが、そういう形で現代人は生きているんじゃないかと思うので、その中でたった一つの居場所とか地元というのはなかなか難しい。これを今後どういうふうに考えていくか。これは深い、面白いテーマだと思いますし、再構築の場合に「じゃあ、そういう地元、居場所をどう皆でつくっていくのか」ということは重要かと思います。

三日月さん、越智さんが言われた「皆さん、滋賀県に死にに来てくださいよ」と、こういうことになった場合、しかし、それは県としてはなかなか大変ですよね。天を仰いでいらっしゃいましたが、どうですか。そのほかのこれまでの議論も含めて御意見をいただきたいんですが。

○三日月 大造

そのテーマで当たるとは思ってなかったんですけど（笑）、でも、以前、CCRC の話があったときに、「死に場所をどこに求めますか？」というとき、琵琶湖が真ん中にあって、周りに山々があって、人と人とが支え合える環境を大事にしている滋賀県、例えば「自分が天に旅立つときに滋賀県なんかはどうですか？」と言えるようになったらいいなというのは本音であります。ただ、そのことを何人かの方に申し上げたときに、もう知事になってましたけど、決まって出てきた反応は「いや、知事、それはあかん」と。なぜか。高齢者ばっかり集まってきて社会的費用が物すごくかさむ、もしくは地域が大変なことになるといった趣旨で反応があったことを強く覚えています。

ただ、越智さんがおっしゃったことと今私が言ったことからも象徴されるように、老いて亡くなる、支え合うということが何となく社会的費用の面で捉えられてしまう風潮とか、「いることだけでいいんだよ」「あなたそのものがいいんだよ」と言えてない社会のありようというのが出ているような気がしてね。だから、例えばこの死生懇話会が、さっき広井さんもおっしゃってましたけど、そうじゃないもう一つの社会のありようというのを何か探っていくきっかけになったらいいなと思いましたね。

あともう一つだけ言うと、私ごとで恐縮ですけど、私は滋賀の人間ですが、連れ合いは熊本の人間です。私の父の墓は大津にあるんですけど、「あんた、死んだらどこへ行くの？」と言われて「僕は滋賀だなあ。で、君は？」と言ったら、「いや、私、滋賀はかなんな」と。でも、そういうことってあると思うんですね。今、１、２時間お話を聞いてて、死に場所をどこに求めるのか、これはどう考えたらいいのかななんていうのが――ちょっとごめんなさい。まとまってないんですけど、すごく大事なテーマとしてある。

そういう意味で言うと、旧来あるお墓とか家とか、在所、地元だけにとらわれ過ぎな

い居場所、死に場所、在所みたいなものもあっていいのかなと思いましたね。

○上田 洋平さん
　そうですね。分骨というやり方もあるかと思います（笑）。息子さんなどは、ひょっとしたら、お母さんのところに行きたいと言われるかもしれないですね。それはちょっとせつないですが（笑）。まあ、この「地元」についてはこれからまた考えていきましょう。
　今、三日月さんがおっしゃった「死」「老いること」、これをどうしてもコストの面で考えてしまうところがある、この辺をどう乗り越えるか、あるいはどういう価値観で考えるかということも必要だろうと思います。
　そういう意味で、この方、「ケアマネジャーの仕事をしています。ターミナルを迎えている方、また、親族に対しても時間も限られている中、揺れ動く気持ちに付き合うことしかできません。」と。あるいは「『もう、長く生きすぎた。』『早くお迎えにきてほしい。』と仰る高齢者の方に対し、どう言葉をかけてよいか戸惑います。」と。
　あるいは、「『人生 60 年時代』は『長寿』は善であり夢だった。早く死ぬことの悔しさと、周囲の哀しみに折り合いをつけることが死生観の中心にあったと思います」というご意見もあります。深いですね。さらに「『人生 90 年時代』には、個人として『自分の苦や周囲への迷惑のない死』が新たなテーマになっているようにも思えます。」
　あるいはまた、「私の祖母は 104 歳まで生きました。しかし、晩年は、耳も聴こえず、目も見えず、ただ食事を摂る日々でした。コミュニケーションは身体を触ってあげることぐらいでした。『早く死にたい』というのが口癖でした。その言葉を聞くのがとても辛かった覚えがあります。ですので、長生きが幸せなのかというお話はとても考えさせられます。皆さんは、長生きしたいですか？」と。
　今紹介したこれらは全部つながっていると思います。そして、これらはまたコストということにもつながっている。長く生きてしまって私は家族にもみんなにも迷惑をかけているんじゃないか、あるいはそれは罪なんじゃないかということですよね。その辺についてどうしたらいいのかな。楠神さんにばかり聞いているような気もしますが、テーマによって偏りがありますことをお許しください。楠神さん。

○楠神 渉さん
　そうですね。今、ケアマネジャーの人から、早くお迎えに来てほしいだとか、ちょっと長生きしたんじゃないかみたいなことに対してどう答えたらいいんだろうかという質問がありましたね。私たちケアマネジャーも、あるいはお医者さんもきっとそうだと思うんですが、こういう問いかけをたくさん受けることが実際にあります。そのようなときに、これが正解ではないかもしれないんですが、私は「どうしてそのように思われましたか？」と聞くようにしております。そうすると、例えば早くお迎えに来てほしいと言われた方が、実はトイレに一人で行けなくなって息子に迷惑をかけているんだと。そんな日々がつらいから早くお迎えに来てほしいんだと思う方がいらっしゃったら、その人には「じゃあ、ちょっとおトイレに行く方法を一緒に考えましょうか」と。「今ここには手すりも何もないけど、ここに持つところがあったら行けませんか？」と言ったら、「そしたら、行けるような気がする」とおっしゃる方もいらっしゃいます。そうすると、お迎えに来てほしいという理由が迷惑をかけているということであれば、「迷惑がかからない方法を一緒に考えよう」みたいなことも一つの回答かなと思いました。
　だから、本心の本心、心の奥から「早く死にたい」と思っている方は実は少なくて、先ほど言ったコストのこととか迷惑をかけるとか、そういったことに遠慮して、そんなことであれば死を迎えたいと思っている方もいらっしゃるんじゃないかと。そういう方が多いように思います。そうであるとすれば、何か違う提案をすることもできるのかなとケアマネとしては思っております。

○上田 洋平さん
　ありがとうございます。はい、越智さん。

○越智 眞一さん

医者の立場から言わせていただくと、やはり何人か「もう死にたい。早うお迎えを」と言う方がおられました。私は、全部「生きたい」という言葉の裏返しというふうに受け取りました。

これは決してやってはいけないことと思いますが、90代後半、もうじき100歳というおばあちゃんが「もうあきまへんな」と顔を見るたびに言ってくる。95歳ぐらいのときから５年間にわたってそう言いましたので、５年間付き合ってもう嫌になったので、「そうかもしれんなあ」と言ったら、ぴたっと言わんようになって、それから５年生きました。やはり「生きたい」という言葉、「もう駄目ね」という問いかけは「どうもないですよ。頑張れますよ」という言葉を期待しておられると思います。それを煩わしいと思わずに拾い上げていく、それが医療であったり、介護であったりということだろうというふうに思っております。

○上田 洋平さん

ありがとうございます。

では、ちょっとZoomの皆さんにもお聞きしたいと思います。

この御意見は宗教者でもある打本さんに投げてみようと思うんですが、「キリスト教やイスラム教、ユダヤ教の死生観では、最後の審判でその後が決まり、それがすべてです。ですが、東洋思想、特に仏教やヒンドゥー教では、１回の死が終わりではありません。続きがあるからこそ、『この生』を大切にする気持ちも大切になります。」とか、あるいは、質問というわけじゃないんですけど、「今の若者たちも霊能者といわれる方から『あなたの前世はこの時代のこのような人でした。三代前は、このような人でした。』というようなことを信じる人も多いです。私の知人のスイスの女性で、前世は日本人の侍だった記憶を持って生まれ、今京都にすんでいる方がいます。」と。この辺の死後の世界へのイメージのこと。あるいはもう一つ、臨床宗教師として「死にたい」「早くお迎えに」というような言葉をどう受け止めておられるかということをお聞きしたい。まあ、「『お迎えに来てもらえる』というのは「あの世」があって、「お迎え」が来るという死生観がある」という意味でもあると思うんですけどね。このような感想やコメントもいただいてますが、打本さん、何か一言いただけますか。

○打本 弘祐さん

はい、ありがとうございます。

今日の広井さんの「日本人の死生観」のところにも仏教というのがあって、そこには「生と死の二極化」とか「浄土」とか「極楽」という言葉が出てまいりました。

それで、仏教の中でも様々ありますけれども、お迎えのことですね。浄土という世界から仏様が迎えに来てくれる、あるいは菩薩が迎えに来るというのは、かつての、例えば平安時代から説かれてくる死生観として一つあります。

最近の研究の中にも、これは決して仏教とか宗教の世界の話だけではなくて、「お迎え現象」というのを東北のほうで調査したものがあります。それは、在宅ケアの中で看取りをしていくわけですけれども、亡くなった方の御遺族にいろいろと聞き取り調査をしていくと、不思議なことですけれども、あの世から先祖が、家族が迎えに来て、最期穏やかに亡くなっていったという遺族の声を拾い上げています。

このようなことを考えますと、宗教、特に私の話で言えば仏教なんですけれども、仏教がかつて言っていたことというのは決して十把一からげに今現代に通用しないというふうに考えるのではなくて、何か日本人の中にそういった死生観を持っていたものが今も実は続いている、それが現代的な調査の中からも明らかになっている。それで一つ「お迎え現象」というような捉え方ができているのではないかなと思います。

ちょっと私ごとで大変恐縮なんですけれども、個人的なことを申しますと、私は３年ほど前に心臓の手術をしまして、そのときに全身麻酔をしたんですね。それで、私の中では意識がないんですけれども、お医者さんに私自身がこんなことを言ったそうです。「仏さんが迎えにきてくれはった。お経に書いてあることはほんまやったんや」と。そんなことを私は言ったそうであります。麻

酔が覚めた次の日にお医者さんから「さすがお坊さんですね」と言われたんですけれども、私の教えの教義の中ではそれは期待してはいけないことと言われてまして（笑）、私は、喜んだどころか、大変落ち込んだという逸話がございます。

私自身は、本当にこれは個人差があると思うんですけれども、そういったことがあるということもまた認めていくのが大切なことなのかなと思います。先ほど前世のお話もありましたけれども、輪廻のことになると、私の中では前世のことは覚えていないのでなかなか語れないんですけれども、そういった考え方を持っておられる方の思いをもう少し聞いていきたいなと。そこを聞いていくことによって何か教えていただける。私の死生観が豊かになるかもしれないし、生き方が広がるような、そういうようなことを思うんですね。だから、決して、特定の教義を信じるとか、そういったことだけではなくて、「私の死生観を豊かにしてくださる」というようなところで話を聞いていきたいなというふうに今ちょっと思ったところです。個人的なことも含めてだったんですけれども、お許しください。

○上田 洋平さん

いえいえ、ありがとうございます。視聴者のなかにも全身麻酔のことを書いてくださっている人がいまして、「麻酔が切れて痛みが来て、泣きそうなくらい痛かったのですが、その時『生きているからこそ痛いんだ』」と。全身麻酔というのは、ひょっとすると、我々が体験する一つの仮死の状態かもしれないですね。

時間が迫ってまいりました。ミウラさんや藤井さん、この際、何かございますか。もしあれば、どちらからでもいいんですが。

藤井さん、どうぞ。

○藤井 美和さん

いろいろ興味深いお話を聞かせていただいて、ありがとうございました。今幾つか出たお話の中で私がちょっと思っていることをお話しさせていただきます。

居場所ですけれども、居場所そのものは具体的な場所である必要はないのかなと思います。それこそ、家のない人だったり、いろんな事情で地元がない人はいっぱいいて、あるいは、あるけど帰れない人もいると思うんですね。日本人はよく「心の居場所」という言葉も使うと思うんですけれども、やっぱり居場所というのは関係性でできているんじゃないかなと思うんですね。具体的な関係性と、それだけじゃない見えない関係性。例えば自分の存在を認めてくれる場があれば、全然知らない場所でも居場所になるんじゃないかと思います。

それをもっと進めると、今日の広井さんの話になっていくと思います。スウェーデンのトーンスタムは私も大好きなんですけど、老年的超越ですよね。それによると、もう既に自分の存在自体が宇宙と一体化するとか、生と死の境がなくなると。突き詰めていくと、居場所を物理的なものに求めたり、あるいは誰かとの関係性が回復しないと居場所にならないと言ってしまった途端、人間は限界を超えることができないと思うんですね。そういった有限性――言葉はちょっと難しいですけど、有限か無限かという構造が、実は私たちが命を考えるときのものすごく大きなハードルになっているんじゃないかと思うんですね。「物理的環境が整ったら幸せなんだ」と言っても、整っていても幸せを感じられない人もいるわけです。私が思う幸せだったり、人間の在り方というのは、やっぱり有限性を超えるところにしかないと思うんですよ。

今日のお話の一番最初にありましたけども、現代は、人間が、脳とか身体中心で見られるようになっています。脳みそを移植するとか、体の遺伝子を治して不老不死にできるとか。本当にそうなっていくと、私たちはいつまでも生きられる。あるいは、今ｉＰＳ細胞で色んな臓器が作れるようになってきました。肺が悪くなったから自分のｉＰＳで肺を入れ替えます、肝臓も心臓も悪くなったから、入れ替えますと…。自分の臓器だから免疫抑制剤を飲むことも必要ないですしね。そうやって100年生きた、200年生きた、300年生きた。じゃあ、どこで「もういいです」と言うのかということがでてきますよね。また、「もういいです」と言った

途端に「それは自殺ですか？」という問題も出てくると思うんです。

つまり、有限の行き先をずっと先に延ばすということが幸せだと思っているけれども、それは、非常に逆説的なものです。実は死を避けようとしていることが「命を考える」ということを難しくしている。もっと言えば、生と死をどう考えるかということを突きつけられていることに目を向けなくなってしまうということじゃないかと思うんですね。

そういう意味では、これから科学が進んでいく次の世代、その次の世代になると、この「いかに生きるか」という問題はものすごく真に迫った問題で、「どう死にますか？」というよりも、死ねない時代だったり、死ぬことが特別なことになることすら考えられます。その意味で、有限である人間が生きるときに人間の有限性を超える老年的超越とか信仰とか神との関係というのが本当に重要になってくるのであって、そこに私は意味があるんじゃないかと思うんですね。脳とか身体に特別な地位を与えて、それが整っていることがすなわち幸せだと言い切ったときに、本当にそうなのか？という疑問も同時に生まれるのです。さらに、脳やiPSをいじることができたとしても、それができる人はお金持ちだけですよね。結局、全てのものお金を持つ者、社会的地位のある者、どれだけ所有しているかにかかっていて、それによって命も長かったり短かったりするんですね。そこは一つの大きな問題で、私たちが自らの有限を延ばすことで幸せを獲得するのでなく、そのような幸せ-価値観から抜き出る、突き出るというところにある、超越性とか老年的超越といったものは、非常に重要な概念ではないかと思いました。

それからもう一つ、「迷惑だから死にたい」ということについてです。これも若い人から高齢者まで、特にお年を召されてずっと人のお世話にならないといけない人が持っている考えだと思います。でも、「迷惑はいけないから、迷惑のかからないようにしましょう」と言った途端に「迷惑はいけない」というメッセージがいっちゃいますよね。

私が聞いた話で１つ心に残っているお話です。ある牧師先生が入院している教会員のお見舞いに行ったのですが、その方が「すいません、先生。こんなに迷惑をかけて…」と言ったら、牧師先生が、「そうですよ、迷惑ですよ、それでいいんです。み～んな、お互い迷惑をかけて生きているんです」とおっしゃったそうなんですね。

私は、支え合いというのは、言葉は違うかもしれないけど、迷惑と同じだと思うんですね。私たちが生まれてきたとき、いろんな人に迷惑をかけて生まれてきてますよ。もう何人も。母親も父親も寝させないでギャーギャー泣いて、おっぱいもらって、そうやって生きてきているという私たちの存在を考えると、誰も迷惑かけないで生まれてきている人なんていません。迷惑、という言葉が良いかどうかは置いておいて、「私が支えてあげている。あなたは支えてもらっている」ということだけに焦点を当ててしまったら、それは本当に上下関係ができちゃって、生きるのがつらくなると思うんですね。

前回、ちょっと自分の話をさせていただきましたけど、私はずっと寝たきりで、全てのことを人にしてもらって過ごした時期がありました。最初はもう本当に迷惑だから生きている意味はないと思いましたけど、その中で生きていていいと思えたのは、やっぱり「あなたが大切」「どんな状態でもあなたが好き」という人たちがいた。先ほどミウラさんがおっしゃってくださってたような、そういう関わりだと思うんですね。私は、そういう関わりがさっきも言った居場所というところにもつながってくると思います。もっと言えば、「迷惑かけて申し訳ない」と言われたときに、その相手にどういう態度を取るのかは、私たちが問われていると思うんです。相手の迷惑を減らす方向ではなく、私たちはそのときどう応えるかというところに、私たちが共同体としてこの人をどう見るのか、私たちは誰かに支えられて生きてきたんじゃないのかという、そういった価値観が問われるのだと思うのです。前も言いましたけど、個人の価値観が社会の価値観をつくっているとすれば、「私たちは、そのとき、どんな価値観を持ってこの人の目の前に立つのか」という、その問われている自分というところに返っていくことが重要なんじゃないかなと思います。

○上田 洋平さん

ありがとうございます。何かもう全部まとめていただいた感じですね。本当に死をどう共同体として分かち合って乗り越えるかというようなところにまた戻ってきたのかなと思います。

進行の不手際でもう時間になってきてしまいました。ミウラさんにはまた次回じっくりしゃべっていただきますね。

私がまとめるという時間なんですが、せっかくなので、時間の限り、紹介をして終わりたいと思います。

例えば、「今、二つの『死への覚悟』を思う。」と。一つは、ミャンマーや香港の市民。二つは「共に最後を迎える覚悟」というのを持った人たちがいるんじゃないかというような御意見です。あるいは、地球全体が生態系破壊、核戦争などで一度に命をなくす覚悟というか、そういう危機もある。「想像の共同体」という言葉があるんですが、実は我々は一度も会ったことのない者同士で国をつくっている。そのときに「じゃあ、会ったことのない人のためになぜ我々はかつて戦争に行ったり、ときにはそのために死ぬことができたのだろう？」そこに何か想像、共同の幻想みたいなものがあるのかもしれない。この方のおっしゃる「覚悟」というのは、「自由」というような普遍的な価値を守る、そのために命を懸ける覚悟というような意味でしょうか。

そのほかには、「生かされているとの気づきは、大人でもなかなか気づけていない。誰にも頼らずに、一人で生きていると思っておられる人も多いように思います。」とか「『死を経験した人はいない』。なのに、なぜ死を考えるか。興味深い話が続いています。」というようなこと、あるいは、こういうことについて懇話会で考えるというのは非常にいい場所なんじゃないかというようなことを書いていただいている皆さんもおられます。

ということでちょっと紹介し切れない部分もありましたが、それについては議事録等を公開する中で共有できると思いますので、またそれも御覧いただきたいと思います。

司会進行が不手際で、十分に皆さんに議論していただけたかどうか甚だ不安なところでありますが、一旦ここで閉じさせていただきます。

三日月さん、最後、1分ほどですが、一言いただけますでしょうか。

○三日月大造

ありがとうございました。今日も大変広くて深いお話を伺えたし、そのお話を基に考えることができたなあと思いました。

この死生懇話会ですが、1回目やって、2回目まで来て、さあ、どこに行けばいいんだろうと。次は何をやればいいんだろうと、ずっと考えながら過ごしてきた150分でした。

ただ、今日はたくさんの残しておきたいメッセージもありましたのでまた後で一つ一つそしゃくしたいなと思っているんですけど、私たち一人一人にとって死や生きていることについて考える機会とか視点の広がりをつくれたらいいなというのが1つ目。「こうあるべき」とかではなくて、せっかく生きているんだから、そしていつか死にゆくんだから、その死とか生について考えるきっかけ、自分なりの物差しを持てたらいいなというのが1つ。

もう1つは、前回ミウラさんがおっしゃったのかな、「一緒に生きている」「共に生きている」でつくられている社会にとって、社会のありようとしてどうあったらいいのかなというのを一緒に考えられたらいいなと思って。比べ過ぎている、急ぎ過ぎている、忙し過ぎる、せっかく生きているのにもったいないなと、こういう考えを持ちながら、お互い認め合う、お互い受け入れ合える、許容し合える、そういう寛容性を持てるような一席をこの死生懇話会の中から持てたらいいなと思いました。

いずれにしろ、今日話していただいた広井さんのメッセージとか各委員の皆さん、あと会場とか御視聴いただいている方から本当にたくさんのお言葉をいただいて、どれも一つ一つ御紹介いただいただけでも本当に深いお考え、お言葉だなと思いました。それらも含めてもう一回読み解きながら、これからにつなげていきたいなと思いました。今日もありがとうございました。

○上田 洋平さん

はい、ありがとうございました。

今日は、本当に広井先生には大きな視点からいただいて、うーんとまた広がりました。今度はもう少し各論に。この間も言ったような気がするんですが（笑）。今日はゲストの先生が「広い」話をしてくださいましたが、次は深井（深い）先生とかお呼びしましょうか（笑）。

ということで、そんな冗談ですみません。終わりにしたいと思います。御参加の委員の皆さん、御視聴の皆さん、ありがとうございました。また次回、お出会いいたしましょう。ありがとうございます。

○事務局（滋賀県企画調整課）

はい、ありがとうございます。

御聴講の皆様には、事前のメールやお手元の資料でも御案内しておりますが、本日御聴講いただいた感想などをアンケートにお書きいただければと思います。オンラインで御聴講の皆さまには、改めてアンケート御協力についてのお願いのメールをお送りさせていただきます。また、会場の皆様は、お帰りの際にアンケートを事務局までお渡しいただけますと幸いです。差し支えない範囲で御回答いただければ結構です。受付でお渡ししましたマジックとペンは、机の上に置いたままお帰りください。

それから、今日はいただいたコメントを全部取り上げられなかったですし、またちょっと字が小さかったりということもあったかと思います。またそれはまとめてオンラインで御覧いただいた皆様にもお送りできるようにしたいと思いますので、御容赦ください。

それでは、最後に、御出演の皆様、委員の皆様は会場やオンラインで御聴講いただいた皆様に手を振っていただき、今回もそれで終了としたいと思います。皆さん、手を振っていただけますでしょうか。ありがとうございます。

これをもちまして、第２回死生懇話会を終了いたします。本日は誠にありがとうございました。

【終了】

〈死生懇話会 ～「死」を捉えた「生」のあり方を 考えるヒントに～〉

滋賀県では、死生懇話会のご紹介とあわせて、「死」「生」に関する様々な取組、考え方について 色々な方にインタビューさせていただいた取材 記事等を県ホームページでご紹介しています。

URL： https://www.pref.shiga.lg.jp/kensei/kenseiunei/kousou/316588.html

滋賀県総合企画部企画調整課 企画第二係

★★★★★★★★「第 2 回死生懇話会」聴講者の皆様からのコメント★★★★★★★★★

「第 2 回死生懇話会」の中で、聴講者の皆様からいただいたコメントをご紹介します。コメントを寄せていただいた皆様、ありがとうございました。

・広井先生からお話があった「地元」、共感します。地元を持てる持てないはある意味運命であり、「地元」を持てる人は幸せなのだろうと思いました。

・「人生 60 年時代」は「長寿」は善であり夢だった。早く死ぬことの悔しさと、周囲の哀しみに折り合いをつけることが死生観の中心にあったと思いますが、「人生 90 年時代」には、個人として「自分の苦や周囲への迷惑のない死」が新たなテーマになっているようにも思えます。

・今、二つの「死への覚悟」を思う。一つは「何かのために命をかける」ということ。
ミャンマーや香港の市民。二つ目は「共に最後を迎える覚悟」ということ。
大きな災害やパンデミック、生態系の破壊、核戦争などで、一度に命を無くす覚悟です。
これらも今考えられる死生観のひとつかもしれないと思っています。

・今の若者たちも霊能者といわれる方から「あなたの前世はこの時代のこのような人でした。三代前は、このような人でした。」というようなことを信じる人も多いです。
私の知人のスイス人女性で、前世は日本人の侍だった記憶を持って生まれ、今京都にすんでいる方がいます。

・死生感を自分ごととして捉えた時、キーワードは「満足を感じる生き方」かと思っています。広井先生の著書「無と意識の人類史:私たちはどこへ向かうのか」で、第３の定常化を論じられている中で、成長・拡大の時代から定常化に向かう時代に人類の文化的イノベーションが起こるとされていますが、これが今の価値観を超越する新たな意識改革が起こることをワクワクしながら感じています。

・人生に長い短いがあったり、障がいの有無などで生き様も変わるけれども、生まれ変わり、何度も「魂」を成長させることが大事だということ聞いたことがあります。なので、次の生まれ変わりのために 90 歳を過ぎて英語を学ばれているおばあさんもおられました。

・ケアマネジャーの仕事をしています。ターミナルを迎えている方、また、親族に対しても時間も限られている中、揺れ動く気持ちに付き合うことしかできません。
ほかには、「もう、長く生きすぎた。」「早くお迎えにきてほしい。」と仰る高齢者の方に対し、どう言葉をかけてよいか戸惑います。

・リアルの「死」を知らない子どもに伝える難しさがあると思います。

・先程、どなたかの話の中にあった「生も意識してるかわかりませんが・・・」で、聞いてみたいことがあります。皆さんは、生きている！！と思った瞬間もしくは、生きていると思う時はどんな時ですか？
私は数年前に全身麻酔で手術をしました。麻酔が切れて痛みが来て、泣きそうなくらい痛かったのですが、その時「生きているからこそ痛いんだ」と耐えた経験をしました。皆さんは、いかがですか？

・たいへん興味深く拝聴しています。空洞化している死生観を再構築（共有）していくためには、今日のような対話の場を、地域地域で増やしていくことが大切かなと思います。
その方策についても、委員の方からご意見を伺えるといいなと思います。

・「帰る場所」について、引っ越しが多く浮き草のような人生でした。夫や自分の親の墓に入りたくない私が、夫と家の近くの合祀の墓に入ることに決めたとき、なぜか心が楽になりました。死んだら愛犬にも会えるので死に怖さをかんじなくなりました。不思議です。

・キリスト教やイスラム教、ユダヤ教の死生観では、最後の審判でその後が決まり、それがすべてです。ですが、東洋思想、特に仏教やヒンドゥー教では、一回の死が終わりではありません。続きがあるからこそ、「この生」を大切にする気持ちも大切になります。

・他人の死に対してどう感じるか。身内の死、身近な人の死とどう違うのか。
飛び込み自殺で電車が止まった時、私の心に「なぜ今なんだよ！」と苦々しく思う気持ちがあったのは事実だが、自殺した人にも家族や大切な人たちがいるはずだし、その人の死の場面に立ち会ってその気持ちを共有できるのか、反省するこの頃です。

・私の祖母は１０４歳まで生きました。しかし、晩年は、耳も目も聴こえず、見えず、ただ食事を摂る日々でした。コミュニケーションは身体を触ってあげることぐらいでした。「早く、死にたい」というのが口癖でした。その言葉を聞くのがとても辛かった覚えがあります。ですので、長生きが幸せなのかというお話はとても考えさせられます。皆さんは、長生きしたいですか？

・子どもと老人が一つの輪になってつながっているという考え方。生と死はグラデーションという考え方。ピンピンコロリでない死に方もあってよいのでは、という考え方は新鮮でした。
このように常々死生観について考えていても、いざ自分がその死と生のグラデーションの中に入ることになったらどうなるのか。でもそのような亡くなり方も、少なくとも自分にとっては幸せなのかな・・・と思いました。

・「死を経験した人はいない」。なのに、なぜ死を考えるか。興味深いお話が続いています。

・貴重な講演、意見交換ありがとうございます。「死を考えない人について」の質問について、私は現代は忙しすぎることが多いと思います。
まず、自分のことをわかっていない、自分のことを考える時間がないかと。ゆとりを持てる時間や、振り返るきっかけを感じとれる感性が必要と思います。考えられるゆとりがあってこそ、幸せにつながるような気がします。そういう意味で死生懇話会は貴重なことと思います。ありがとうございます。

・勝ち残る人が、社会をつくっているからなんですね。

・生かされているとの気づきは、大人でもなかなか気づけていない。
誰にも頼らずに、一人で生きていると思っておられる人も多いように思います。

・『死』は、例外なくすべての命に必ず訪れるもの・・・
・私は団塊世代の少し後の年代ですが、妻を 10 年前にがんで亡くし、難病だった娘を 2 年前に不慮の事故で亡くしたことでこの死生懇話会に申込みました。特に子に先立たれたことほど辛いことはない。自身は将来いつの日か死に直面したときは妻子に会えると信じ喜びを感じるのではと

思っています。

・危篤の時に度々、立ち会うことがあり、その方が回復したとき、ICU に入っていた期間
自分が知っているお寺に行っていたとはっきりした記憶を話されたり、先に亡くなっている方に会ったとか・・・
不思議ですが生と死はつながっているし、本当にあると思います。

・藤井さんの意見に共感！！社会がもっとお互い様が大切。障害があったり、老いても迷惑をかけたらいいと思います。それが、支え合いだと思います。犯罪でなければ、迷惑をかけたり、助けてもらったら、その相手に返すのではなく、社会にお返しするという日本人の昔ながらの文化をもう一度思い出して欲しいと切に願います。

・死生観　本人だけでなくその家族も含めた中で考えていくものだと思いました。
家族、地域ぐるみで考えていけたらよいなあと思いました。

・人は、「幸せ」や「豊かさ」を求めるのですが、そのことを求めることが、幸せにつながらないのかもしれません。どうでしょうか。何かもっと異なるものを追い求めなければ、人間として価値ある人生にならないのではないでしょうか。それは何？